週刊読書人
毎週金曜日発行
定価　363円
本体　330円
株式会社 読書人 発行
東京都千代田区神田神保町1−3−5
郵便番号101-0051
電　話　03(5244)5975(代)
ＦＡＸ　03(5244)5976
振替口座　00150-9-57070
前金購読料50週16000円
https://dokushojin.com
© 株式会社読書人2020

# 対談＝川瀬慈×奥野克巳
# ともに奏でる♪往還する人類学
## 『エチオピア高原の吟遊詩人』『マンガ人類学講義』『モノも石も死者も生きている世界の民から人類学者が教わったこと』

川瀬　慈氏

奥野　克巳氏

映像人類学を専門とする川瀬慈氏が、テクスト、写真、映像からなる『エチオピア高原の吟遊詩人　うたに生きる者たち』（音楽之友社）を上梓した。時を同じくして人類学者の奥野克巳氏は『マンガ人類学講義　ボルネオの森の民には、なぜ感謝も反省も所有もないのか』（MOSAとの共著、日本実業出版社）で、マンガによるエスノグラフィーという新しい試みを行っている。本書の解説にあたる「マンガ人類学入門」では川瀬氏の活動についても触れられており、奥野氏の最近作『モノも石も死者も生きている世界の民から人類学者が教わったこと』（亜紀書房）も合わせ、お二人に人類学を巡って幅広くお話いただくこととした。（編集部）

### 人類学をいかに崩すか、逸脱と調和の動的な均衡を探って

**奥野**　川瀬さんがアズマリという歌い手たちを追った『エチオピア高原の吟遊詩人』には、テクストのほかに写真が多用され、アムハラ語と日本語の歌詞が挿入され、さらに巻末にはQRコードがついていて、いくつかの映像作品を観られるようになっています。中でも『ドゥドゥイエ　禁断の夜』は、性をあれほど豊かに表現するパフォーマンスがあるのかと衝撃を受けました。歌語りのところどころで触覚を用います。手を下半身にもって行ったり、スカートを捲り上げたり。聴衆を感覚的に細やかに刺激するパフォーマンス。あれは夜の酒場で、たまたま撮れたシーンだったのでしょうか。

**川瀬**　彼女は性風俗を主題にした歌で有名なアズマリです。毎晩彼女のパフォーマンスを求めて、たくさんの聴衆がアズマリベットと呼ばれる酒場にやってきます。彼女は同時に、この店の店主でもあり、経営感覚に優れたビジネスパーソンでもあります。

**奥野**　そうなんですね。セックスを歌うとはつまり、人の生を表現するということですよね。非常に詩情豊かで文学性があり、魅了されました。

**川瀬**　性風俗のほかにも、国際政治とか、欧州のプロサッカーリーグについて歌うことを得意とするアズマリもいます。店や歌手によって、歌の内容が異なるのです。それぞれ戦略的に特色を出しています。

**奥野**　ほかの映像作品もどれも印象深くて、先に結論をいってしまうと、川瀬さんを通じて、人類学はもっと崩してもいいと、教えられた気がするんです。

人類学は長らく、局地へフィールドワークに行き、民族誌（エスノグラフィー）を、字義通り文字で記述する、形式的なスタイルを積み重ねてきました。それを、視覚だけでなく聴覚や触覚による伝達を含めて、いかに崩していけるのか。写真や映像と組み合わせたマルチメディア的民族誌、川瀬さんはそういう型破りを試みておられる。

**川瀬**　ありがとうございます。

人類学を崩そうという野心があったわけではなく、自然にこうなりました。つまりアズマリやラリベラという、歌い踊り、遊動する人たちをいかに記録し表象しようかという模索の中で、必然的に映像に辿り着いたのです。フィールドで向き合う人々に促されるように、マルチモーダルな記録、表現の方法を探ってきました。

また、ここ数年取り組む、テクストにおける様々なストーリーテリングの試みも、映像における話法の試行錯誤の延長にあります。アフリカのストリートにおける人々の生き生きとしたやりとりを描くにはどうしたらいいのか考えながら、小説だったり詩であったり、論文だったり、適宜表現の方法を変えています。

**奥野**　つまり川瀬さんの行っていることは、いわゆる再帰人類学を経て、それを乗り越えようとする試みでは必ずしもない、ということですね。

**川瀬**　僕は九〇年代後半に学部生でしたので、ポストモダン的な人類学の省察や自己批判、それを越えていかに民族誌を再構築するのか、という問いかけには、当然影響を受けました。でもそれが僕の人類学の核心では必ずしもない。

**奥野**　川瀬さんと私とは、年が一回り以上離れています。私が最初にフィールドに入ったのが九〇年半ばですが、現地に行って愕然としたんです。伝統的な行事や儀礼が盛んに行われ、人間の豊かさを土地の習俗の中に見出したいと人類学を志したわけですが、フィールドにはそういうものが失われつつあった。近代化され、電気も水道も、テレビもあって、資本主義が深くなだれ込んでいた。

ポストモダン的な自己反省を受け入れ、いかに乗り越えるのかという議論のうねりに人類学が呑まれていきます。世代論は不毛かもしれませんが、かつてのあの輝かしい人類学をいかに蘇らせるのかが、僕らの年代の人類学者にとって、意識の深いところにあり続けました。ようやく存在論的転回が起り、さらに人間のみならずモノや動植物との関わりにおいて人間を考えていくマルチスピーシーズの思考へ辿り着くのに、四半世紀もかかってしまった。

でも川瀬さんの話を伺っていると、輝かしき人類学の時代を取り戻すというようなところがなくて自由さが潜んでいる。求めているのは最初から、人々がどのように暮らしているかとか、奏でられる音楽の周囲にあるストリートのざわめきとか、日常的な現実です。それはマリノフスキがフィールドワークにおいて重要視した「実生活の不可量的部分」と重なります。

**川瀬**　二〇代の頃の僕は即興演奏を行うミュージシャンでした。楽器奏者との演奏に限らず、映像作家や画家、身体表現者など、多様なジャンルの表現者たちとジャムセッションを繰り広げていました。当時の人類学をめぐる重い空気を吸いつつも、自身の身体と感覚を基軸にしたインプロヴィゼーションに向きあっていました。そこからビジュアル・エスノグラフィーに入っていったので、再帰人類学をめぐる試行錯誤を経たというより、即興をめぐる探究の側面が強かった。自身の映像実践においては、先行する民族誌映画以上に、ジャズのインプロからの影響が大きいです。いわゆるフリージャズに突入する手前ぐらいの時代の様式の。特定のコードやテーマを奏者間で共有しつつ、逸脱と調和の動的な均衡を探っていくインプロは、人類学的な映像制作の地平と響きあいます。つまり、フィールドの言葉や文化・社会的脈絡、行動をめぐる様々な規範を意識しつつ、それと調和したり逸脱したりしながら、人類学者は奏者、コンダクター、アレンジャーとして音を奏でる。人々と音を奏で、聴き、奏で、聴き、そうして出来上がる作品は、予定調和的なインプロに基づく楽曲ともいえます。

### withの人類学、生そのものと会話すること

**奥野**　映像作品『精霊（笑）の馬』では憑依儀礼であるザールが記録されていますが、霊媒の女性が川瀬さんに「カメラをくれ」と執拗にいうシーンで終わります（笑）。

**川瀬**　そうそう。謝り倒してカメラは渡しませんでした。あの後もう一悶着ありました。

**奥野**　アズマリは演奏で儀礼の場を「あたためる」ことが求められ、精霊それぞれの特徴にあわせて旋律や歌詞を使い分けると。ザールでは精霊と人々がジャムセッションを繰り広げるわけですね。そうした伝統的なシーンとともに、霊媒との悶着も映像を豊かにしていると思います。

本書にはエチオピア人の著名な映画監督であるハイレ・ゲリマと川瀬さんの議論についても触れられていますね。

**川瀬**　実際は議論ではなく大ゲンカでしたけど（笑）。

**奥野**　（笑）これは映像人類学あるいは人類学にとって、示唆に富むものです。ラリベラ（歌のみで門付を行う芸能者）の夫妻の活動を記録した、川瀬さんの映像作品『ラリベロッチ　終わりなき祝福を生きる』がハイレ・ゲリマの上映セミナーに招待されたと。そこで監督が指摘したのは、聴衆の存在が際立ちすぎている。夫妻の歌は歌詞に注目がいくように、静かな場所で撮影されるべきだ。ストリートの人々からの嘲笑や批判は、エチオピアのイメージを悪くするので排除すべき。歌の即興性よりも、ラリベラのスピリチュアルな役割に注目すべきだと。要するに監督は、雑多なストリートの周囲の空気をも含めたパフォーマンスではなく、そこから切り出した演奏だけにしか意義を認めていない。

この箇所を読んで想起したのは、ティム・インゴルドの『人類学とは何か』です。マリノフスキの重視した不可量的部分は、それ以降の人類学では継承されず、フィールドワークで得たデータは民族誌の中で「純化」され、民族誌が作られ続けてきた。マリノフスキ以降の人類学がしてきたのは「of」、つまり研究対象について何かをいう学問だった。それに対して彼らとともに、人間の生について学ぶ「with」こそがフィールドワークだと、インゴルドは指摘しています。

川瀬さんの大ゲンカは、それに応じる話だと思うんです。つまり監督は古い人類学者。芸能として価値のあるところだけを、現地の現実から取り出そうとしている。一方、川瀬さんが試みているのは「with」であり、インゴルドのいう「人間の生そのものと会話すること」である。

**川瀬**　話の中に「純化」というキーワードが出ました。純化によって、エチオピア北部のストリートの人々の息吹、生活の中の雑多なノイズ、すなわち人々の狡猾で猥雑ともいえるようなやりとり、ラリベラやアズマリによる聴き手との応酬の中で創発される音楽行為等が消されてしまいます。

しかしながら、この監督の言葉のみならずとも、ある種の純化プロセスを、我々がアカデミックな制約のなかで、無自覚かつ無批判に身体化しているともいえないでしょうか。研究対象の記述のみならず、研究者がフィールドワーク中に費やす膨大な時間、経験、思考の伝達をどう行うかという問いそこにおいて奥野さんの『マンガ人類学講義』のような試みに行きつくことは、実際のところ、なかなか難しい。既存の研究成果公開のかたちや情報伝達のモードを徹底的に疑い、失敗してもいいから、様々な方法や様式を試してもよいのではないでしょうか。また、人類学者の声や身体も文化の表象をめぐる議論のメディアであると捉えてよいと思います。

その意味で『マンガ人類学講義』は、人類学にとっての事件だし、野心あふれる問題提起です。パンドラの箱が開いたともいえる（笑）。

**奥野**　うれしいですね。マリノフスキは「自己変容」ということもいっていますが、フィールドの現実に自分を浸りこませ、没入させて、自らを変容させることが真のフィールドワークだと。しかしその姿勢も、人類学者たちに継承されてきませんでした。

インゴルドのいうように、「of」を放棄し「with」において何が得られるのかというと、自分がそこで変わっていくということなんです。面白い学問ですよね、人類学というのは。自己を変容することが、学問の中に据えられているという。

（2面につづく）

## 今週の読物

▽川内倫子・山崎ナオコーラ対談「写真と言葉、子どもとの時間」……（8）
◇連載＝「自由」と肉体性（ジャン・ドゥーシェ氏に聞く）⑲（聞き手＝久保宏樹）……（5）
◇連載＝〈書評キャンパス〉内藤正典著『となりのイスラム』（二宮響子）……（5）
◇連載＝ニュー・エイジ登場㉙（井岡詩子）……（7）
◇連載＝日常の向こう側　ぼくの内側㊻（横尾忠則）……（7）
◇連載＝中平卓馬をめぐる50年目の日記㉝（柳本尚規）……（7）
▽宮澤縦一著『傷魂（ヴィルトゥ）』……（野沢　啓）
（4面）
▽冨原眞弓著『ミンネのかけら』……（伊高浩昭）
▽井口高志著『認知症社会の希望はいかにひらかれるのか』……（最首　悟）
▽野田恵剛訳『原典完訳　アヴェスタ』……（田島明子）（前田耕作）
（5面）
▽白川静著『漢字の体系』……（円満字二郎）
▽F・スコット・フィッツジェラルド著／上岡伸雄編訳『ラスト・タイクーン』……（小林章夫）
▽カリ・ファハルド＝アンスタイン著サブリナとコリーナ』……（八木寧子）
（6面）
▽ジョン・アレン著『美食のサピエンス史』……（根ヶ山光一）
▽神沼克伊著『あしたの南極学』……（近藤祉秋）
▽宇田和子著『ブロンテ姉妹の食生活』……（田中淑子）

## 今週の書評

（3面）
▽木本好信編『古代史論聚』……（佐々田悠）
▽坪井秀人著『三十世紀日本語詩を思い出す』

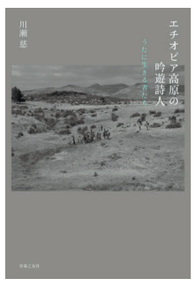
## なぜ名前にホシがあるのか？ ㉝ インベカヲリ★

©インベカヲリ★

アマゾンプライムで観られる、野生動物の生態を映したBBCのドキュメンタリーシリーズにハマっている。特に、集団で子育てする皇帝ペンギンの回のラストが面白い。大きく育ったヒナたちに、親ペンギンたちは最後の餌を与えると、何も告げずに集団で去ってしまうのだ。今生の別れが唐突に訪れるわけだが、ヒナたちはそのことを何も知らない。一週間後、お腹を空かせたヒナたちは、大人たちが戻ってこないことに気づき、一同海へ向かう。しかし海までの道のりは遠い。道中、大きな鳥に襲われたり、道に迷ったりするのだが、そこに全然種類の違う大人のアデリーペンギンが突然現れ、鳥を追い払い、一緒に歩いて道案内をし、あげく躊躇するヒナたちを海に飛び込むよう促すのだ。なぜ何の関係もない通りがかりのペンギンが？

私は自然動物たちが人間の知らないところで、このような人間臭いドラマを繰り広げていることにショックを受けた。よく、自分が見ている世界以外に、本当に世界は存在するのかという疑問を持つ人がいるが、それと似ている。地球は人間のためだけに存在しているわけではない、という事実を突き付けられるのは妙な気分なのだ。（いんべ・かをり＝写真家）

出版界に新風を
書店新風会
全国有力書店のネットワーク
◆会員書店３０社
事務局：㈱読書人内
☎03(5244)5975



四六判・252頁・3000円
音楽之友社
978-4-276-13571-0
TEL.03-3235-2151

カズオ・イシグロと日本　幽霊から戦争責任まで　田尻芳樹・秦邦生編
カズオ・イシグロ失われたものへの再訪　記憶・トラウマ・ノスタルジア　W・ドゥロンク　三村尚央訳
ピエール・クロソウスキーの現在　神学・共同体・イメージ　大森晋輔編
心はどこに在るか　ブルースト、サン＝テグジュペリ、まど・みちお　武藤剛史
真の自己を内面に探求したプルーストらの作品を手がかりに、世界と〈私〉が現われる場としての心の働きを捉え直す。　喪失を抱えた登場人物たちの語りを記憶研究の観点から読み解く、イシグロ作品への新たな批評的試み。　小説家、思想家、翻訳家、画家……特異にして多様な、いまだ全貌の明らかでない作家の研究の最前線を豊富なテクストで辿る。　四〇〇〇円　三五〇〇円　三五〇〇円　三五〇〇円
水声社　文京区小石川2-7-5　〒112-0002　tel.03-3818-6040　fax.03-3818-2437　URL：http://www.suiseisha.net/blog/　◎価格は税別
【ブッククラブ入会は comet-bc@suiseisha.net へ】

◆12月、NHK「100分de名著」で紹介決定！　普及版
ディスタンクシオン I・II　【社会的判断力批判】　P・ブルデュー
「趣味」から階級化を実証した社会科学の圧倒的金字塔、待望の普及版！　石井洋二郎訳　各三六〇〇円
◆難解・大部の名著を読み解く、最高の水先案内！
ブルデュー『ディスタンクシオン』講義　石井洋二郎
現代社会分析に必須の書を、訳者が一章ずつ明快に講義。　二五〇〇円
◆革命と戦争の時代、感情の近代的相貌を描き尽す。
感情の歴史　全3巻　A・コルバン＋J・J・クルティーヌ＋G・ヴィガレロ 監修
II 啓蒙の時代から19世紀末まで［第2回配本］　アラン・コルバン編　小倉孝誠監訳　八八〇〇円
◆ベートーヴェン生誕二五〇年記念！
ベートーヴェン 一曲一生　新保祐司
なぜベートーヴェンは近代を、そして現代を超えるのか？　コロナ禍の下、一日一曲を聴き尽し辿りついたその神髄。　二五〇〇円
■月刊『機』B6変32頁／月号No.344　村上陽一郎／川勝平太／石井洋二郎／小倉紀蔵／三砂ちづる／今福龍太／姜克實／中西進／宮脇淳子／加藤晴久／『砂ちづる』●年間購読料／1000円（送料・税込）
■ブックガイド「機」見本誌呈　＊表示の価格は税抜価格
〒252-0206 相模原市中央区淵野辺3-9-8 ☎042-754-0111 振替口座00120-5-96201
http://www.tujiyama-shoten.co.jp/　藤原書店

東大卒ピアニスト角野隼斗の母にして、コンクール入賞者を100名以上輩出したピアノ指導者による、「原石を磨く」子育て論
「好き」が「才能」を飛躍させる子どもの伸ばし方　角野美智子著　四六判／定価1600円＋税
天才は才能が作るのか？　それとも環境が作るのか？　新しい切り口で音楽家への理解を深める一冊！
1冊でわかるポケット教養シリーズ
音楽家65人の修行時代　澤谷夏樹著　文庫判／定価950円＋税
眠っている感性を3段階で呼び覚まそう！　音×五感で実践する耳トレ！
ひらめく直感力をぐんぐん鍛える耳トレ！ドリル【CD付】　小松正史著　B5変型判／定価1400円＋税
ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス　〒171-0033 東京都豊島区高田3-19-10　TEL.03-6894-0250（営業）　https://www.ymm.co.jp

創元社
第38回毎日出版文化賞受賞作
創元アーカイブス
ヒトの足——この謎にみちたもの　水野祥太郎著
《ヒトの足の不思議に迫る名著、新装復刊。序文／今西錦司、梅棹忠夫》
二足直立歩行の起源に新説を提唱した著者のライフワーク。恐竜の足の謎解きから扁平足問題、履物まで知的興奮に満ちた考察。
◆A5判・並製・272頁・定価（本体4000円＋税）
大阪市中央区淡路町4-3-6　☎06-6231-9010 Fax06-6233-3111　千代田区神田神保町1-2 ☎03-6811-0662

東北大学発—NHK健康番組などでおなじみの上月正博教授らが検証した音楽の効果
こころとからだが楽になる音楽活用術　医師と音楽家がすすめる音楽によるリハビリテーション　上月正博・酒井博美著
音楽CD付　ピアノ 角聖子
音楽を聴くことによりストレスの緩和や不眠予防にも最適！　CDには童謡やクラシックなど本書から厳選した18曲（1分）を収録。　1800円
繊細な心の科学—HSP入門—　串崎 真志著
人に対する繊細さと、諸感覚（音や匂いなど）の敏感さをもつHSP（Highly Sensitive Person）について心理学的に解説。　2200円
風間書房　東京都千代田区神田神保町1−34　電話 03−3291−5729・価格は税別　https://www.kazamashobo.co.jp

われわれは宗教をどう理解し、いかに向き合うか？　各3800円
日本宗教史　全6巻　伊藤 聡・佐藤文子編
⑤日本宗教の信仰世界　〈企画・編集委員〉伊藤 聡・上島 享・佐藤文子・吉田一彦
葬式、ご利益、戦争死者…。信者の視線を捉える多様な〈信仰〉の歴史。
【既刊】
❶日本宗教史を問い直す……吉田一彦・上島 享編
❸宗教の融合と分離・衝突……伊藤 聡・吉田一彦編
❹宗教の受容と交流……佐藤文子・上島 享編
❻日本宗教史研究の軌跡……佐藤文子・吉田一彦編
【続刊】❷世界のなかの日本宗教…上島 享・吉田一彦編　『内容案内』呈
吉川弘文館　東京都文京区本郷7-2-☎03-3813-9151　最新版『出版図書目録』送呈　税別

未知谷　michitani.com
チェーホフの山　工藤正廣
徒刑囚の労働と死によって育まれたサハリン島。チェーホフは八千余の囚人に面談調査、彼らが人間として生きる姿を知った——アニワ湾を望む丘のサナトリウムを舞台にロシア詩研究第一人者が語る、人々がその魂を生きる物語。　●二五〇〇円
アウラの方へ　美の断章　柴橋伴夫評論集成
芸術家の手により作品に宿った〈かけがえのない光〉を求めて美の〈遊歩者〉となった美術評論家。北海道を拠点に、半世紀以上にわたった美の逍遥を集成する——イサム・ノグチ、安田侃、佐伯祐三からアイヌ・アートまで。　●三〇〇〇円
東京神田猿楽町2-5-9　03-5281-3751（本体価・宅配可）　Fax. 5281-3752

西川秀和＝[著]
【第一期＝建国期の躍動】各2800円
①青年将校 ジョージ・ワシントン
②③革命の剣 ジョージ・ワシントン（上・下）
④⑤建国の父 ジョージ・ワシントン（上・下）
アメリカ人の物語
独裁を嫌い、三権分立に固執し軍隊への文民統制の伝統を創始した初代ジョージ・ワシントンを中心に展開する合衆国建国物語！
第I期 第5巻発売
——〈全5巻〉完結！
悠書館（内容見本送呈）Tel.03(3812)6504 価格税抜　〒113-0033 文京区本郷3-37-3-303　http://www.yushokan.co.jp/

世界の大学を旅しよう！
300枚のカラー写真で綴る世界の大学と図書館
著者／三竹大吉
電子本 ボイジャー・プレス　800円＋税　ISBN 978-4-86239-996-0
紙本 Jacaranda Press　1,800円＋税　ISBN 978-4-86239-997-7

山川出版社　https://www.yamakawa.co.jp/
【世界史リブレット人87】　姫岡とし子＝著　A5変型　120頁　本体800円
ローザ・ルクセンブルク　—闘い抜いたドイツの革命家—　最左派の理論家として活動したローザ。激動する国際情勢のなかで打ち立てた革命論と、その実現に向けた行動を描き出す。
日本古代律令制と中国文明　史学会シンポジウム　大津透＝編　これまでの日唐律令の比較研究の成果をふまえて、より視点を広げて日本律令制の意義を多角的に考える。　A5判　320頁　本体4200円
加賀藩前田家と朝廷　【山川歴史モノグラフ39】　千葉拓真＝著　本体5000円　324頁
東京都千代田区内神田1丁目13-13　〒101-0047　☎03(3293)8131　税別

東海道五十三次をよむ　江戸文学が描く見どころ満載の五十三次の旅。江戸時代にタイムスリップして、歴史・美術・宗教をも加味し、江戸以前、近代の東海道の姿を追う。　鈴木健一編　▼2800円
日本幽霊画紀行　死者図像の物語と民俗　東北から九州まで、寺院所蔵の隠れた名品150点のカラー図版と共に、絵に秘められた幽霊話や、仏教民俗ならではの風習を明らかにする。　堤 邦彦著　▼2800円
共振する異界　遠野物語と異類たち　現実と非現実を自由に往来する異類たちに光をあて物語の世界観を紐解く。　永藤 靖著　▼2500円
美術でよむ中世ヨーロッパの聖人と英雄の伝説　高木昌史 著　文学・美術に描かれた「聖人や聖女、「アーサー王」「カール大帝」の物語を味わい、ヨーロッパの中世像が浮き彫りになる。　▼2800円
三弥井書店　税別価格　目録送呈　港区三田 3-2-39　TEL03-3452-8069　http://www.miyaishoten.co.jp

## あいだと往還、メビウスの帯とアニミズム

川瀬　『マンガ人類学講義』では、描かれない部分、ある種の「間」が面白い。例えば『ソウル・ハンターズ』の逸話。狩猟者がライフルで撃った後、血を流して倒れる動物のディテールを描かない。また、鼻で笛を奏でながら故人を想うシーン。以上の場面では、あえて文字や絵で補完的な記述をしない。読み手が息を深く吸い込み、想像の旅に出ることができる余白が与えられる。これはマンガが豊かに探究できる表現の可能性だと思います。精神科医の木村敏がアニミズムを捉える上で、人とモノの「あいだ」を考えることが重要であると述べていることが『モノも石も死者も生きている世界の民から人類学者が教わったこと（以下『モノ石』）』に書かれていましたね。現代音楽家の武満徹は、日本語の「間」は、無音かつ無機的な静寂を指すのではなく、来たるべき音に命を吹き込むための有機的なスペースだといっています。民族誌映画でも、いかに多くのショットによって対象を包括的に捉えるか、という問いとは真逆の、いかに撮らないのか、語らないのか、という問いがあると考えています。

奥野　私はストーリー担当で、作画やコマの配置などマンガをどのようにエンタメとして仕立て上げていくのかはもっぱらマンガ家MOSAの担当でした。川瀬さんのいう「間」や、デフォルメの仕方などは、彼のマンガ家の魂から生まれてきたものです。

川瀬　また『モノ石』は、アニミズムと仏教の橋渡しが試みられる本ですが、マルチスピーシーズ人類学の議論を、仏教的な観点からさらに広い次元へ解き放つようにみえます。

奥野　この本ではアニミズムについて、片づけコンサルタントのこんまりさんから始めて、ナウシカ、宮沢賢治、ユング、ベルクソン、エドゥアルド・コーンへと論を進めていきましたが、日本の仏教を外して考えることはできないと思い至ったんですね。マルチスピーシーズ人類学も、日本の仏教的な自然観に通じるものです。中国の道教の無為自然が、浄土真宗の宗祖親鸞の下で自然法爾となる。道教は禅宗の中にも入っていますし、日本では「山川草木悉皆成仏」という、平安以降に広まった仏教思想があり、それそのものがアニミズムだといってもいい。そうしたことを再発見しました。

川瀬　アニミズムは、土地との共感覚的かつ融即的な経験である、と『モノ石』は述べます。自己と他者、あるいは別個に存在するものを同一化してとらえる「融即」という概念は、本書の通奏低音でもあります。自己と他者、往相と還相の議論で、いい得て妙だと思ったのは、アニミズムの世界との連絡通路が〈メビウスの帯〉であるという指摘。こちら側とあちら側という固定的な二元論に帰結させず、絶え間ない往還という動性への着目。主客、自他、人間と非人間、生死という二項が生成したり、その境界が溶解したり、気づかぬうちにあっちにいたり、こっちにいたり、常に流動している。

奥野　曇鸞から継承された、親鸞の「還相論」を基礎に考えていますが、〈メビウスの帯〉と組み合わせて、こちら側とあちら側が切り分けられているのではなく、一つながりの帯状を絶え間なく移動し続ける、その動的なプロセスにおいて、何かを感じたり、見ることができるのではないかと。

先日聞いた話ですが、心臓発作を起こすと、人は心臓を危険な異物として、何とか制御できないかと考えるというんです。つまり自分の内側にも他者的存在があるということですが、そうした自であり他である体とどのように往還しながら、対話し付き合っていくのか。これもアニミズムといえるのではないでしょうか。アニミズムとは人外の他者との間で起きる現象であり、結局のところ人間中心主義の考え方ではあるのですが、往還運動を通じて人間だけがこの世界の主ではないということが表れてくるのではないかと。

川瀬　僕らの身体を微生物や細菌、あるいは水や空気など、様々なものが出たり入ったりする。ならば、「私」という主体を固定的な存在としてはたして捉えられるのだろうか、私とあなたを本当に分けられるのだろうか、そんな問いが生まれます。映像人類学でよく議論される「シネ・トランス」という概念がありますが、撮影中に、自分が撮影者なのか被写体なのか、観察者なのか観察される側なのか、ある種、融即的とでも呼べるような感覚に陥ることがあります。

奥野　カメラと一体化する瞬間があるということですね。つまり目であり、パースペクティブが、カメラそのものになってしまう。そこからまた、撮影者であるこちら側に還ってくる、そういう往還運動が起こっていると。さらには被写体を客体、自分を主体だと考えていると、いつの間にか自分が客体になっている。そうした主客の入り乱れる経験も含まれる。

川瀬　そうです。撮影者は常に固定的な位置から対象を俯瞰的に観察記録するわけではないです。被写体の言葉や立ち居振る舞い、撮影者と被写体の関係によって、撮影のアプローチや映像表現のありかたは変化していきます。両者がなんらかのゴールを共有し、共犯的な関係で撮影、制作を展開させていくときもあります。撮影者、被写体、互いの言動に影響を与え合うインプロビゼーションです。

## 人類学の中の人類学、思考における不断の脱構築運動

奥野　マリノフスキのいう「不可量的部分」は、人類学者は継承してこなかったけれど、民族誌映画には息づいていたと最近捉え返されています。映画作家のロバート・フラハティは、マリノフスキが『西太平洋の遠洋航海者』を出したのと同じ一九二二年に『極北のナヌーク』を公開しましたが、そこにはイヌイトの生活の不可量的部分が描写されていました。そしてその後、撮影者と被撮影者の「あいだ」に着目したのが、映像人類学者ジャン・ルーシュです。この流れの上で、映像を撮ることとはどういうことか、あるいは映像をどのように撮ることで、現実に迫ることができるのか、そういう考えが深められてきた。

川瀬さんの映像作品も、まさにそこにいるかのような、実人生が捉え出されている。『僕らの時代は』では、タガブとイタイアという少年たちを写し取っていますが、大人のアズマリに邪魔にされ、彼らのなわばりから追い出されながらも、演奏機会を求めて歌い続ける。先行き分からずフィールドに飛び込んだ川瀬さんが、彼らに自分自身を重ね合わせる心情も伺えます。アムハラ語を介して川瀬さんが彼らに関わり、同じ時間を過ごしていく様子は、彼らを記録するというよりも、川瀬さんが入ることによって出来上がる現実という感じがします。これこそがマリノフスキのいう不可量的な部分ではないかと。

川瀬　そう思います。人類学者カワセが、アズマリを調査している、と理路整然と説明できるものではなくて、不可量的部分、それよりさらに踏み込んで、カワセとタガブとイタイアが、誰が主体でも客体でもなく、相互貫入しあい、互いのやり取りの中で創発される物語です。ただ制作する中で、いくつかのキーワードは浮かび上がってきました。僕と少年二人によるアズマリ隠語による会話・対話、大人と子どものなわばり争い、子どもたちのライフコース。以上をキーワードに据えたダイレクトシネマかたた、という説もありました。また蠟と金の分析は、エチオピア正教会とのつながりですべきではないかと。ただそれもまだ謎に包まれているんですよね。

とにかくいえるのは、生死に深く関わっていると。彼らは日々修辞を用いた音楽活動をしているわけですが、その言葉に隠された世界に、死というものが入ってくるということが、とても興味深いんです。

川瀬さんの映像作品には、人々の生が豊かに活写されています。一方、アズマリの歌詞のうちに込められた死の側面は、いまのところまだ充分に捉えられていない気がします。おそらくそれは川瀬さんが今後、さらに時間をかけてかかわっていくテーマなのでしょう。フィールドの人たちの病や死を経た上で作品がどのようなものになっていくのか。今後なお期待したいと思っています。

川瀬　アズマリたちは祝祭儀礼や娯楽の場で人を楽しませる道化である一方、死という世界が常に存在するということを、歌を通して聴衆にリマインドします。単なるパフォーマーではなく生と死についての真理について我々に考えさせる吟遊詩人でもあります。

僕はお寺に生まれたのですが、生まれ落ちた瞬間から死に関連する職能につくという刻印が自身に押されていたと思います。東海地方の狭い盆地のなかの村落共同体。何百年にわたる寺と檀家のつながり、しきたり、しがらみ、そして様々な慣習……それらが息苦しくて、アフリカまで逃げました。ザールのような憑依の世界にどっぷり浸かり、やんちゃ極まりない精霊たちと戯れてきたのも、自分に打ち込まれた刻印への反動であったのかもしれない。でも結局アフリカにも同じような世界やしがらみがあって、「これは逃げられないな、自己を真剣に受け取らねば」と、エチオピア北部の高原で腹をくくりました（笑）。

奥野　バングラデシュのテラワーダで僧として学びましたが、二十一歳のときだからずいぶん前ですね。このところ、自分が年をとってきたこと、さらにコロナが発症して、生物にとって不可避な死というものが、自分の中で存在感を増しています。そこで仏教が何を説いているのか、改めて気になっています。

いまはフィールドに行けない状況が続いていますが、こういうときにフィールドとどう向き合うのかも、大きな問いになってきますね。

川瀬　最終的なフロンティアは自分の心の中にあるのではないかと思っています。自分にとって二〇二〇年はメディテーションの年でした。深い森の中をさまよい歩くように、心というフィールドを遊歩する、深い思索のフェイズでした。

奥野　僕も最近どうも二十五年前に行った農耕民のフィールドが思い出されるんです。彼らの考え方がいま現在、私が日本で考えていることと、よく似ていると。やはりつねにフィールドを通じて考えているんですよね。人類学者であることが染み付いている。すでに人類学が自分の一部となっているのかもしれない。

川瀬　フィールドにいかないという、フィールドワークを行いながら、自己変容していくと。

奥野　常にどんな場でも、自己変容しうるということですよね。

（おわり）

★かわせ・いつし＝国立民族学博物館／総合研究大学院大学准教授。専門は映像人類学。著書に『ストリートの精霊たち』（鉄犬ヘテロトピア文学賞）、映像作品に『Room 11, Ethiopia Hotel』（イタリア・サルデーニャ国際民族誌映画祭にて「最も革新的な映画賞」）など。一九七七年生。

★おくの・かつみ＝立教大学異文化コミュニケーション学部教授。二〇〇六年以降、東南アジア・ボルネオ島の狩猟民プナンとともに研究している。著書に『ありがとうもごめんなさいもいらない森の民と暮らして人類学者が考えたこと』など。共訳書多数。一九六二年生。

## 解釈することによって貧しくなる

奥野　川瀬さんの本の中に、農作業とアズマリの話がありました。農作業をしている後ろで、アズマリは戦争の古物語を歌い、雄叫びをあげたりする。そこで川瀬さんの思考が面白いのは、なぜ農作業の現場でアズマリが演奏するのか、その理由を解釈することを放棄する。「アズマリは、マシンコの演奏で人々の感情を司り、煽り、それを天に、大地に解き放つコンダクターなのだ」というにとどめ、ただただ人々の動きや音そのものを楽しみ、感じようとする。

川瀬　アズマリたちに、作業効率を上げるために歌っているのかとか、労働作業を娯楽とする機能が音楽にはあるのか、などと問えば、「カワセおまえは間違っている」と叱られるのは目に見えています（笑）。大事なのは、「他者を真剣に受け取る」姿勢なのではないか。既存の学術的な概念のみに依拠して、事象を測定し、考察することによって失われてしまうような、人々の動態や生の豊かさがある。

奥野　解釈することによって貧しくなる。その意識は、川瀬さんの仕事に表れていますね。映像作品などは特に、知識ではなく感触として伝わってくるものが大きい。

川瀬　映画の視聴者は、視聴後、言葉にならない感情をこちらにぶつけてくることがあります。映画の公開を通して、視聴者の記憶や感情を旅する新たなフィールドが開けてきます。そこにおいて、完成作品は実のところ存在しない。様々な声や感情を誘発、喚起するデバイスとしての映画があり、作品を各国、各地で公開することによって、被写体に関するこちらの予想しなかった情報や、視聴者の感情や記憶がわーっと制作者であるこちらに押し寄せてくる。これらの様々な声、感情といかに向き合い、応答し、それらをさらなる研究に反映させていくのか、が映像人類学で問われています。

奥野　作品は常に完成されたものではなく、プロセスであるという考え方。仏教を引き合いに出すと「無自性」、つまり自性そのものなどない。最初から対象を定めて何かをしていくのではなく、常に関わり続け、制作し続け、動き続けることでしかない。それが生きることであり、考えることである、ということですよね。

これを民族誌、あるいは人類学の中に広げていくのは、困難はありますが問題提起として非常に面白いですね。人類学の内部から具体的に問題を示してくれる人はあまりいない。川瀬さんはやはり人類学における確信犯的な革新者です（笑）。

川瀬　確信犯的な革新者！　ダジャレのようですが、大変光栄です。

## 死という課題、阿頼耶識の層

川瀬　今後、人類学の記録と表現については、さらに多様な試みが模索され、よりマルチモーダルな世界に向かっていくでしょう。様々なメディアを絡み合わせたオンラインジャーナルのような研究プラットフォームの存在が前提になってきます。そのような状況において、非言語的な深淵なイメージの世界といかに対峙し、それをいかに駆使していくのかが我々に問われます。この本の話に戻りますと、僕はまだ、アズマリの歌に内包された、広大なイメージ世界の玄関口に立っているとしか思えません。表面的な言葉の意味の奥に、阿頼耶識のような層が広がっています。アズマリの歌いまわしを、セムナワルク（蠟と金）といいますが、蠟が溶けた後に、隠れた部分、すなわち金、広大なイメージの世界が顕現します。多くは諸行無常についてや、人は死んだら土に還るというような死生観、あるいは権力批判などです。

奥野　蠟と金、あるいはアムハラ語の歌の間に挟み込まれる隠語は、支配勢力に対して、対抗的なメッセージを伝達する媒体として機能していて、非言語的な深淵なつまるところ人類学者のエートスは、人類学そのものに対しても、反学問的な態度で臨むということではないか。こう考えると川瀬さんがしておられることは、「人類学の中の人類学」かもしれない。人類学の中で人類学であることをぐらつかせるということを川瀬さんは試みておられるのではないか。それを人類学と規定することが必ずしも正解ではないかもしれませんが、川瀬さんの映像人類学や「アンスロ・フィルム・ラボラトリ」の研究活動は、別のところへ人類学を連れて行く、新しい展望をもった振る舞いに見えるんです。

川瀬　映像人類学は文化人類学の下位分野、というような位置づけをされることが多いのですが、そうあるべきではないと思っています。むしろ先ほど述べたマルチモーダルな冒険を通して、人類学を知的に内破するような、問題提起をしなければ意味がないと考えています。「反学問」さながらに、人類学そのものの思考、実践を問い続ける。結果パンドラの箱が開き、さらに世界の謎が深まった、というのでもいいじゃないかと（笑）。

奥野　なるほど（笑）。

思います。

奥野　川瀬さんがその現実に加わることによって生み出される、インゴルドがいうところの「人間の生そのものと会話すること」。それはどちらかというと人類学というよりも文学やアートに近いものかもしれない。私としては、川瀬さんが人類学をどう思っておられるのかが気になっていきます。

川瀬　生そのものと直に会話し交感する、そしてそのプロセスを生き生きとあらわす。そこでは偶発性と対峙し、戯れる姿勢も求められます。当然、既存の人類学における研究公表の場は窮屈です。論文の他にも小説、詩、映画、身体を用いたパフォーマンス、絵画やアニメーション、バーチャル・リアリティ、インスタレーション……また、それらを組み合わせた様々な方法が可能です。研究発表のかたちや場は多様化し、オンラインという場も間違いなく主要な発表と議論のフォーラムになっていきます。そんな中、アートの表現、語法も学びつつ、思考における不断の脱構築を展開させたいですね。形式にとらわれず。

奥野　インゴルドの思考を咀嚼する上でもう一つ、非常にシンパシーを感じたのが「反学問」という言葉です。人類学という学問の出自を考えると、やはり絶対的に想定されるのが「外部」です。外部へ出て行き数年を過ごし、あるいは帰ってきてまた出かけて、という往還の中で考える。その営みが人類学という学問にとっては、やはり重要なのではないか。その往還は当たり前のことですが、我々の社会や自分自身を絶対視しないことにつながります。つまり相対主義は、人類学者がこの一〇〇年間、フィールドワークをしながら得た、一つの職業的なエートスなのではないか。

関連してインゴルドは面白いことをいっているのですが、公的なディベートに人類学者が呼ばれても、人類学者が語る言葉が、議論を深めることにはならない。議論は振り出しに戻ってしまうかもしれないと。そこから考えると、論じられていることの根底に疑いを差し挟むことこそ、人類学者の態度ではないでしょうか。例えば日本学術会議の問題に対しては、その外部に立って反学問する人類学から挑むことが重要なのではないか。

A5判・248頁・1800円
日本実業出版社
978-4-534-05810-2
TEL.03-3268-5161

四六判・248頁・1700円
亜紀書房
978-4-7505-1661-5
TEL.03-5280-0261



岩波新書　今月の新刊
岩波新書編集部 twitter
https://www.twitter.com/Iwanami_Shinsho

二一世紀を生きるための知恵の宝庫
SDGs
南博・稲場雅紀（広報外交担当日本政府代表・大使／一般社団法人SDGs市民社会ネットワーク政策担当顧問）
—危機の時代の羅針盤
達成年まで一〇年を切り、パンデミック下でその真価が問われているSDGs。元日本政府交渉官とNGO代表とがSDGsの現状と展望を紹介する。
本体820円　978-4-00-431854-5

辺境に身を置くことで見えてくるものがある——
地方の論理
小磯修二（北海道大学公共政策大学院客員教授）
霞が関から北海道の地方大学に身を投じ、地方の課題解決に取り組んできた著者が、自らの体験をもとに語る、地方活性化のヒント。
本体840円　978-4-00-431855-2

すべては患者さんの「日常」を取り戻すために
がんと外科医
阪本良弘（杏林大学医学部付属病院肝胆膵外科診療科長・教授）
難治とされる肝がんや膵がん治療の最前線にいる外科医が、がん治療の歴史と現状、師からの指導、患者からの学びなどを綴る。
本体800円　978-4-00-431856-9

それは「反日」なのか？
文在寅時代の韓国
—「弔い」の民主主義
文京洙（立命館大学名誉教授）
妥協なき民主主義を追求し「積弊の清算」を掲げるも、国内外で激しい毀誉褒貶と軋轢を生む文在寅政権。その達成と課題を描く。
本体860円　978-4-00-431857-6

近代国家成立以来の大変革は実現するのか？
グローバル・タックス
—国境を超える課税権力
諸富徹（京都大学大学院経済学研究科教授）
GAFAなど巨大多国籍企業が台頭する中、苛烈を極める「租税競争」。その巧妙な仕組みを解き明かし、対抗していく筋道を展開する。
本体820円　978-4-00-431858-3

たちまち重版
三島由紀夫
悲劇への欲動
佐藤秀明
衝撃の自決から五〇年。今こそ書ける評伝。
978-4-00-431852-1　本体860円

岩波ジュニア新書
◉顔面偏差値、ルッキズム、ブス、いじめ、差別…
人は見た目！と言うけれど
—私の顔で、自分らしく
外川浩子
あざ、脱毛症、口唇口蓋裂、アルビノ……「見た目問題」当事者たちの体験など様々な視点から、見た目と生き方を問いなおす。
978-4-00-500926-8　本体860円

岩波現代文庫〈創刊20年〉
◉「われわれ」を問い直す
政治と複数性
—民主的な公共性にむけて—
齋藤純一
「余計者」を見棄てようとする脱ー実在化の暴力に抗し、一人ひとりの現われを保障する。開かれた社会統合の可能性を探究する書。
978-4-00-600426-2　本体1620円

◉現在を妖しく予言するディストピア小説
青い花
辺見庸（解説＝小池昌代）
男は鉄路に沿って歩く。マスクを着けた人びとが彷徨する世界で、「青い花」の幻影を抱え……。奔放な文体で紡がれる現代の黙示録。
978-4-00-602329-4　本体860円

岩波文庫
民主体制の崩壊
—危機・崩壊・再均衡
フアン・リンス／横田正顕　訳
デモクラシーはある日突然、死に至るのではない。危機を昂進させる政治過程を経て崩壊する。その分析枠組を提示した古典的研究。
978-4-00-340341-9　本体1010円

次郎物語（五）
下村湖人（解説＝原彬久）（全五冊完結）
朝倉先生のあとを追って上京する次郎。先生が主宰する「友愛塾」の助手をつとめながら、次郎は自己を磨く充実した日々を送る。
978-4-00-312255-6　本体950円

渋沢栄一伝
幸田露伴（解説＝山田俊治）
「日本資本主義の父」渋沢栄一の評伝。近代を体現したその生涯を、枯淡洗練された名文で描く。露伴史伝文学の名品。
978-4-00-360038-2　本体810円

◉「答えのない時代」の先駆的教育を描く
FUTURE EDUCATION!
学校をイノベーションする14の教育論
教育新聞編
社会が凄まじい速度で変化する「答えのない時代」に、教育がするべきこととは。ノーベル賞受賞者による根源的な教育目的再考からAI活用などの教育イノベーターの取り組みまで、未来志向の教育潮流を導き出す。
四六判　本体1800円　978-4-00-061436-8

岩波書店　http://www.iwanami.co.jp/　〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
お求めの岩波書店の出版物が小売書店の店頭にない場合は，その書店にご注文下さい．小社に直接ご注文の場合は，ブックオーダー係(049-287-5721)をご利用下さい．　[定価は表示価格＋税]

# 多種多様な論文が並ぶ一大論文集

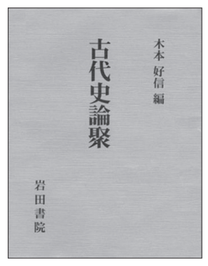
## 専門的な研究へと開かれた入り口として

佐々田　悠

**木本　好信編**
## 古代史論聚

総勢六十五人の執筆陣による、本文八三八ページにおよぶ一大論文集である。歴史学・文学・考古学にわたる幅広い立場から論じられた、多種多様な古代史の論考が並ぶ。序によれば、本書は編者の木本好信氏が自らの古稀を記念して編んだものだという。人文学界には還暦や古稀を記念して後輩や教え子たちが論文集を献呈し、学恩に感謝する習わしがあるが、本書は当人が発起して知人たちに声をかけ、自身で編集作業をこなされたというから珍しい。その経緯のみ聞くと奇異に思われるかもしれないが、木本氏のこれまでの歩みに照らせば、その実直な人柄によるものと納得させられる。

木本氏は米沢女子短期大学、甲子園短期大学において教鞭を執り、甲子園では学長の重責を担われた。この間、『藤原仲麻呂政権の基礎的考察』や『平安朝日記と逸文の研究』など、奈良時代政治史と平安時代の公卿日記を二つの柱として精力的に研究を進められ、近年はミネルヴァ日本評伝選を三書も執筆するなど（『藤原四子』『藤原仲麻呂』『藤原種継』）、その筆力は衰えることを知らない。その一方で驚嘆すべきは、長く研究誌『史聚』の事務局を一人で務め、編集・発送などの実務を今なお担われていることである。今年で創刊四十年、第五十三号を迎えた同誌は、内外の会員による論文発表の場であり続けている。ことに若手の研究者にとって、そうした発表の場はありがたい。本書はその拡大版ともいうべきもので、今やベテラン・中堅となった方々が、木本氏の『史聚』への献身や学恩に答えるべく論考を寄せたわけである。




A5版・852頁・12500円
岩田書院
978-4-86602-104-1
TEL.03-3326-3757

本書では統一的なテーマは設定されておらず、個々の論考は短編で、個別的な考証が主であるから、必ずしも読みやすいとは言えない。ただ、見方によっては、専門的な研究の入り口がさまざまに開かれているわけで、専門外の読者にとっても研究者たちの取り組みを知る良い手引きとなるであろう。個人的に気になった論考をいくつか挙げると、荊木美行「『匣』と『褶』」は、『播磨国風土記』に出てくる「匣」が中国漢代に見られるような遺骸を包む金縷玉衣の類いであった可能性を提起する。一字一句を虚心に読み、見落とされてきた論点を掘り起こすのは文献史学の王道である。北野達「朝影に我が身はなりぬ」は、万葉集に見られる「朝影」の表現を「身のやせ細った姿」とする通説を見直し、「暁闇の不確かな像」という理解を軸に解釈すべきことを明らかにしたもの。上代文学研究の醍醐味に触れる思いがする。栄原永遠男「月借銭と布施」は、役所から前借りする月借銭の利息が給与（布施）総額の五分の一程になっており、給与の一定割合を回収する仕組みであった可能性を示唆する。これまで末端役人の困窮した暮らしや、仲介者の中間搾取として論じられてきた月借銭であるが、研究史上の重大な論点が提示されたと言える。関根淳「中世移行期の国家論」は十・十一世紀という古代・中世の狭間の国家論。近年は権門や荘園制の萌芽を重視し、この時代を中世に引きつける傾向にあるが、公権力の変化を指標として古代の範疇でとらえる見方を支持する。国家や時代の本質をどこに認めるか、継続的な議論が求められよう。

このほかにも興味を惹く話題は多い。ひとつひとつは短いが、大きな議論はこうした個々の考証の積み重ねがあってこそ成り立つことは言を俟たない。こうして学問は少しずつ前進していくのであろうと、改めて感じた論集であった。（ささだ・ゆう＝宮内庁正倉院事務所・日本古代史）

★きもと・よしのぶ＝龍谷大学特任教授・奈良時代政治史・古記録。著書に『藤原式家官人の考察』『藤原南家・北家官人の考察』『奈良時代の政争と皇位継承』など。一九五〇年生。

**坪井　秀人著**
## 二十世紀日本語詩を思い出す

まずは不思議な書名について考えるところから始めなければならない。書名と同じ序章名から第一章〜第六章、終章「石原吉郎を思い出す」まですべての章に「〜を思い出す」というタイトルが付けられていることがなにやらいわくありげである。思い出すためにはなにものかを記憶ないし認識したことがなければならない。ところがいまの詩人たちの多くは詩史のことなど関心が薄く、記憶する以前の無知の状態にある。だから本書の「思い出す」主体はもっぱら著者たる坪井の問題意識であり、詩人たちへの挑発なのである。

それから、これまでの明治、大正、昭和といった元号区切りの文学史という殻を破って二十世紀という新たな切断を入れたこと、それを詩史に限定したことが本書の基本的な方法である。そこに元号ごとの文学史（詩史）という偶発的な区切りとは別のもうひとつの偶発的な区切り線を入れたという以上の必然性の導入がこの本の生命線である。原有明、第二章の北原白秋についての論及が本書の半分すなわち二〇〇頁を超えるという比重のかけ方を見てもわかるように、二十世紀の最初の二〇年に近代日本語詩の孕む問題が大きく取り上げられているのである。

二十世紀初年代すなわち明治三十年代前半に詩的キャリアをはじめた蒲原有明を論の最初においたところに本書の手柄の大きなウェイトがかかっている。北村透谷でも島崎藤村でも土井晚翠でもなく蒲原を発端におくことの意味こそ、坪井が《なぜ蒲原有明なのか。この〈なぜ〉を問うことが、ここで語るすべてのことがらの根幹であると思う》（三二頁）と力こぶを入れるように、なぜ本書が書かれたのかの理由である。そのために岩野泡鳴訳のアーサー・シモンズ『表象派の文学運動』（『象徴主義の文学運動』）が当時の日本の文壇に与えた大きな影響が呼び出される。そこで問題になってくるのは、西欧からの翻訳語による日本語の変容という問題であり、また自然主義と象徴主義の同時的移入からくる混乱した影響という問題である。坪井によれば、蒲原有明の詩の問題は《自然主義／象徴主義の間に宙吊りになった》（九四頁）ところにその詩作活動が短命に終わった理由があり、そのそうした《倍屈に倍屈を重ねた挙句に閉塞に陥っていった蒲原の隘路》を抜け出すことができたのは《翻訳語としての近代日本語》という軛から放たれたところで詩歌をものすることが出来たからではないだろうか》（一六六頁）とみなし、北原が当時の詩壇を巧みに牛耳り、勃興する近代世界にいちはやく憑依して、なおかつ新民謡や童謡の世界にメディアを拡大した時代の寵児となっていく姿を描き出す。すなわち有明から白秋へ、また詩人ではないかと思う。そのことはとりあえず異論として出しておきたい。

四六判・464頁・4000円
思潮社
978-4-7837-3822-0
TEL.03-5805-7501

# 日本近代史の原点解明

## なぜ蒲原有明を詩史の発端においたのか

野沢　啓

時代の転換とともに二十世紀日本語詩は運動するという一定の帰結を見出すのである。

詩史的見取り図としてはまさに坪井の言うとおりだが、わたしには有明にたいする評価がすこし低すぎる気がする。たしかに有明は世渡りが不器用であったし、いかにも古語っぽいことばを駆使して時代性に制約されたところがあったとはいえ、単純に詩としてみれば白秋の安上がりな近代性にもまさる詩の固有のボディを堅固にもっていた詩人ではないかと思う。そのことはとりあえず異論として出しておきたい。

さて、本書の第三章以降はいわゆる日本近代詩の枠組みからみるとかなり異例である。第三章の民衆詩派まではいいとして、第四章〜第六章が朝鮮日本語詩、合州国移民詩、民衆詩（サークル詩）という切り口がユニークで、モダニズム詩、プロレタリア詩などはほとんど論及されていないばかりか、戦後詩以降への論及はひとり石原吉郎のみに限定されている。ソビエト強制収容所からの遅れた日本帰還が戦後時空間との齟齬をきたす石原の問題はやはり戦後詩としては別格のものがあり、二十世紀後半の詩が論じられていないことの理由にはならない。これはこの力作へのないものねだりになるのだろうか。（のざわ・けい＝詩人）

★つぼい・ひでと＝国際日本文化研究センター教授・日本近代文学。名古屋大学大学院博士後期課程満期退学。著書に『声の祝祭』『戦争の記憶をさかのぼる』『感覚の近代』など。一九五九年生。

**宮澤　縱一著**
## 傷魂（しょうこん）

### 忘れられない従軍の体験

戦争という〈制度化された殺戮合戦〉に敗れた日本軍兵士は生死の狭間で人間性を失い餓鬼（がき）となり、生存本能から殺傷、窃盗、強盗、詐取、強姦、裏切りと狼藉（ろうせき）を働きまくった。そんな地獄絵が展開する〈狂気の絶頂〉である戦地に生きた著者宮澤縱一（一九〇八―二〇〇〇）は、敗戦が濃厚だった一九四四年半ば、三六歳で日本陸軍に召集され、比国ミンダナオ島に赴く。大卒で英語を話す知識人ゆえに当初から、侵略戦争に突き進んだ日本という国の在り方、その軍隊、教育、制度などに疑問を抱き、鋭い批判眼を光らせながら兵卒として苦しい日々を送る。本書は、四五年七月米軍に救われた後に復員した著者が四六年に出した原著を敗戦七五周年を機に復刻したもの。〈人間は絶体絶命の窮地では荒廃の極致に達する〉が、〈それでも誇り、正直、誠実、寛容、人類愛などの人間性は死なない〉。この両面を照らし出す優れた戦地体験記である。

「地獄」は比国に向かう輸送船内で早くも始まった。初年兵の寝る場は不十分、便所は糞で汚れ放題、古参兵は暴力を恣（ほしいまま）にし、病人や発狂者が出る始末。これでは戦意は戦う前に失われる。そんな「昭和の奴隷船」の野蛮ぶりを次のように描く。「人権も糞も軍隊ではまったく問題にならなかった。階級が低いというだけで四十近い教養ある紳士が二十歳前後の野卑文盲の徒輩（やから）に顔が変形するほど痛めつけられる」。著者の体験でもあろう。

軍隊教育を「実践よりも丸暗記本位の誤れる形式的な愚劣な精神教育が国を禍（わざわい）し、ついには今日、敗戦の憂目（うきめ）まで見るような破目に陥（おちい）れた」と批判。「兵隊から判断力を奪い、上官の命令への絶対服従を教え込むため、命令の徹底しない敗戦状態になるや兵士は一層始末の悪い存在になる」と指摘する。「死の行軍」もあった。「帯剣で頭を割られ、血が戦闘帽を紫色に染めるくらいは良い方だった。腰と膝を銃で叩かれ、化膿して死んでいった者もいた。気の狂った者もいれば、隙をみて林の中で首をくくって死んだ者もいた」。悪しき上下関係に起因する〈内なる敵〉が日本軍を蝕んでいたのだ。

比国の日本軍は四五年には敗残部隊に等しくなっていた。隊内の階級差は意味を失い、上官が報復を恐れて部下の機嫌をとるようになり、部隊は「断末魔」に近づいていた。「糞尿と屍の臭気が山蛭（やまびる）に血を吸われながら、敗残兵の群から取り残され友兵と二人きりになると、手榴弾で自殺を試みる。この件は圧巻。

「手榴弾をいざ手にすると、戦闘中の興奮状態とまるで違って、走馬燈のように色々なことが浮かんできて、打ちつける勇気が出ない。この時ほど、特攻隊を志願し散った若者たちの勇気を羨ましく思ったことはない。覚悟を決め、石を目がけて力いっぱい手榴弾を叩きつけた。ゴツンとした手応にはっとした瞬間、私は無意識に手榴弾を横に置いた。否、発作的か本能的か、夢中で手榴弾を鼻につく山道」を衰弱と飢餓と睡魔に苛まれつつ歩くうちに著者は「運命論者になり、自分は死なないという信念さえ持った」という。だが米軍の砲撃を浴び鉄片で脚に重傷を負い、蛆虫に食われる。母親からの影響、生涯のパートナーとなる夫マーティンとの出会い、法律家を志し、首席で大学を卒業。ロースクールで教鞭を執ったあと、「性差別をめぐる裁判で、最高裁で六件争い、五件に勝訴」（六八頁）した。そして一九九三年、ビル・クリントン大統領の指名により、連邦最高裁判事に就任することになる。

四六判・114頁・1300円
冨山房インターナショナル
978-4-86600-079-4
TEL.03-3291-2578

# 死地から生還、戦時日本の過ちを綴る

## 「現代の好戦的愚かさ」に警鐘鳴らす

伊高　浩昭

しかし衰弱死は必至だった。そんな絶望的場面で米軍に救われる。捕虜の身だが病院で手当を受け回復する。「私は出征以来、待望し続けた平和の生活を取り戻すことができた。動物的生活から、人間的生活へ！　奴隷から、自由人に！　こうして私はまた再び還元した」と述懐する著者は復員し、本書を書く。

「比島の日本軍戦死者の絶対多数は、一発の弾丸も撃たず戦争を呪い軍閥を恨んで死んだ。〈小国でも良いから平和な国に生まれたかった。三千年の歴史が何でありがたいのだ。何が無敵日本だ〉と兵士たちは語り合い嘆いていた。日本で生まれたことを兵士に不幸だと嘆かせた罪は誰にあるのか」と本書を結ぶ。

日本軍の教育、敗戦、一般日本人が戦後余儀なくされた厳しい生存競争は、利己主義、不寛容、ずる賢い詐欺的精神、公共性の欠如などを〈第二の天性〉として日本人に植え付けたと思わざるを得ない。それがコロナ禍のさなか、弱肉強食の新自由主義経済路線が罷り通る現代日本社会の、多数派貧者と少数富裕者の分断、知性と反知性のいがみ合いなど分断状況の根っ子にあるのではないか。

そんな示唆に富む本書の価値は、敗戦直後より大学教授になったのは、死線を彷徨った戦時体験を忘れずに超克するためだったからではないか。少女時代に宮澤から可愛がられたというバイオリニスト黒沼ユリ子が跋文に「本書は若い人々の必読書」という復刻の意義に触れている。（いだか・ひろあき＝ジャーナリスト）

★みやざわ・じゅういち（一九〇八―二〇〇〇）＝音楽評論家。京都帝国大学卒。一九四四年五月出征、戦後復員。武蔵野音大教授を務める。著書に『プッチーニのすべて』など。

**新刊**

**G・ブラックウェル／R・ホブデイ編**
## ルース・ベイダー・ギンズバーグ



先日、現役の米国連邦最高裁判事のまま亡くなった、ルース・ベイダー・ギンズバーグの発言を収めた本書は、次の印象的な一節ではじまる。

「一九五六年、ルース・ベイダー・ギンズバーグがハーバード大学ロースクールに入学したとき、新入生の男子は五百人いたが、女子は九人しかいなかった。数ある校舎の中で、女子トレイがあるのは一棟だけだった。当時のアメリカに男女差別を禁じる法律はなく、法律事務所の中には、就職に際して、女性には面接さえしないところもあった」（一一頁）。

序章と終章にあたる「ルース・ベイダー・ギンズバーグについて」において、短文ではあるが、彼女の生い立ちからその人生の道行きが詳細に語られる。母親からの影響、生涯のパートナーとなる夫マーティンとの出会い、法律家を志し、首席で大学を卒業。ロースクールで教鞭を執ったあと、「性差別をめぐる裁判で、最高裁で六件争い、五件に勝訴」（六八頁）した。そして一九九三年、ビル・クリントン大統領の指名により、連邦最高裁判事に就任することになる。

大学での講演やインタビューを中心に構成されているため、語りも平易で読みやすく、ひとつひとつの言葉が読む者の心に響く。人生を振り返り、本当に重要なことは何だったかと問われ、RBGは次のように応える。「変化を求める運動に参加できたこと。娘が息子と同じくらい尊重され、女性が才能と努力次第で何でも実現できるための運動に、参加できたことですね」（一七頁）。

頁をめくるたびに、勇気を与えられ、人間が生きる意味とは何かを考えさせられる、珠玉の一冊である。（橋本恵訳）（四六変・八八頁・一〇〇〇円・あすなろ書房・二〇二三・三一〇三・三三五〇）

5道県を新たに追加！
北海道、富山県、鳥取県、島根県、愛媛県
※北海道、滋賀県は一部未収録期間あり

全国47都道府県の地域面紙面イメージが閲覧可能になりました！

朝日新聞社の記事データベース
聞蔵Ⅱビジュアル

1879年の朝日新聞創刊から今日まで、1,500万件超の記事をインターネットで簡単に検索できる、公共図書館・大学図書館向けの国内最大級の記事データベースです。今春、縮刷版のオプション「全国の地域面」では北海道、富山県、鳥取県、島根県、愛媛県の地域面イメージを新たに収録。待望の全国47都道府県の地域面が閲覧可能になりました。昨年、「朝日新聞縮刷版1879〜1999」の印刷範囲指定機能も追加され、縮刷版での紙面イメージから必要な記事を切り取って印刷も簡単。広く、深く、詳しく記事・情報を検索できる「聞蔵Ⅱビジュアル」をぜひご活用ください。

地域面は、エリア別のDVD購入プランもご用意しております。※詳しくは、お問い合わせください。

全国の公共・大学図書館にてご利用いただけます。※図書館によっては記事データベースを導入していない場合がありますので、ご利用の際は図書館にお問い合わせください。※使い方・各種マニュアルなど、詳しくは図書館カウンターまでお問い合わせください。

料金など詳しくはこちら ▸ http://www.asahi.com/kikuzo/　朝日新聞 検索案内　検索

お問い合わせ・お申し込みは　朝日新聞社 法人営業部 聞蔵サポート　TEL:03-5541-8689 月曜〜金曜（祝日除く）10:00〜18:00　FAX:03-5541-8691 e-mail:dna-support@asahi.com　朝日新聞

曲がったことは許さない！
江戸のニューヒーロー
幡随院長兵衛が大活躍
御金蔵破り
九代目長兵衛口入稼業 二
小杉健治
歴史時代 いぶり文庫
護岸工事を巡って、普請奉行が不正!? 大金が絡む企みに嵌められた長兵衛、必死の反撃なるか！
◎本体680円 978-4-08-744184-0

椎名誠 著者初のハードボイルド・ロマン！
EVENA エベナ
違法ドラッグ「EVENA」をめぐって暗躍するアウトローたち。幻覚と現実の境界を描く衝撃作！
◎本体660円 978-4-08-744176-5

いとうせいこう
小説禁止令に賛同する
小説が禁じられた世界で、作家の痛切な叫びが！「小説の可能性」に挑んだ近未来ディストピア長編。
◎本体460円 978-4-08-744177-2
表現の自由とは？

伝説の空手家 松茂良興作、波瀾万丈の一代記！
今野敏
武士マチムラ
琉球王朝に実在した空手の天才・松茂良興作。薩摩藩と清国に翻弄されながら、空手の真髄と琉球のあるべき姿を追求した男の生き様。
◎本体760円 978-4-08-744175-8

集英社文庫
11月の新刊 好評発売中
◎表示価格は本体価格です。別途、消費税が加算されます。◎一部地域で発売日が異なる場合があります。
★お求めはお近くの書店、または集英社HPから https://www.shueisha.co.jp

# 学術読物

## 冨原　眞弓著
## ミンネのかけら
### ムーミン谷へとつづく道

# 心地よく激しく厳しい記憶
### 書き手との出会い、人の間のダイナミックス

最首　悟

オギュスタン・ベルクは五〇年前来日して、東京は脱構築そのものであり、パリの先だかパリのはるか以前だかにあるといったこれまた慨嘆だか驚嘆だかの思いをもらした。その東京でその頃、シモーヌ・ヴェイユの本にたまたま出会い、ガツンと来てのめりこみ、パリに留学、バゲット一本の食事を続ける女子学生がいた。そして二〇年後ヘルシンキで、ムーミンの本にたまたま出会い、いっぺんに好きになり、翻訳の許可をもらいに作者ヤンソンを訪ねて行く。

ミンネとは記憶のこと。なんとも偶然と集中と破天荒のるつぼのような、一人の日本人女性の、記憶のパッチワークとはどんなものになるのだろうか。読むに値しないわけがない。かけらとは集めると一つの器になるのだろうか、それとも予想もしないなにかになるのだろうか、パッチワーク的だとしても、縦糸横糸の織物的だとしても、器の出来合いが間のなにかに関わるというほかないような読後感を覚える。

著者は、すぎたことを振りかえらない（反省しない）のが特性のわたし、と書く。わたしたち日本列島人は良くも悪くも〈今から〉人間である。そして今からどのようにスタートするか、その支えを恣意的な過去に求めると批判される。しかし普通の暮らしを続けるための過去は意識した過去にならず、反省のようにもならないとも言われる。著者は普通の暮らしを続ける女性なのだ。そして、「なんとなく、いまがそのとき」と感じて、記憶の断片を集めた。その結果は強靭な意思を持ち、不意のように訪れた機会に摑まれた卓抜な冨原眞弓という一人の女性像を描き出すことになった。

シモーヌ・ヴェイユとトーベ・ヤンソンは、一九一〇年を中に挟んで生まれた同世代の女性といっていい。しかし二人を並べる人はいないだろう。ムーミン・アニメは日本でつくられ膾炙したが、その出来栄えと人気について、作者のヤンソンに異論があるなどということは、日本では知られない。第二次世界大戦は、純粋へという高い硬度の志向を生きた。第二次世界大戦末期、戦後フランスの再建のためのテーゼ、あるいは礎石となる思想に取り組んだ。遺作となったのが『根をもつこと』である。それは神の実在と、充溢の彼岸と神不在の此岸の間への注視、すなわち仲介への傾注でもあった。ヴェイユとヤンソンを重ねるとき、この間ということが浮かんでくる。間は流動概念であって、間からの、そして間への運動を要求する。

本書はヴェイユの回想とヤンソンとの交流の間に、ヤンソンに出会うきっかけとなる出来事の記憶が置かれる。ヴェイユとヤンソンという女性の間に二人のスウェーデン女性が登場してくる。なんでも見てやろうの、さばさばしてタフな、今を生きる女性たちが、世界旅行の途中、たまたま著者の家に長期宿泊することになる。この二人に著者はうちとけ、ウマが合う感じをもつ。同志のような遠慮のなさが生まれた。

登場する女性たちは単純ではない。もちろん著者も。一極集中に見えて対極に向かう。その間のなにか、その間のひろがり、その間のダイナミックスが人間そのものだという実感が立ち上ってくる。人間という言い方を噛みしめる。人間とは人の間なのだ。人は複数存在であることを喚起し、そして人と人でないものとの間に止みがたく惹かれる。著者の記憶のかけらは心地よく激しく厳しいのだが、主旋律といえば、〈間〉なのだということに深い促しを覚える。ヒューマンビーイング、パーソンを、明治期、日本ではわずかにしか使われていない〈人間〉と訳して以来の、日本語を母語とするわたしたちにまともに向き合わねばならない。（さいしゅ・さとる＝和光大学名誉教授・社会学・環境哲学）

★とみはら・まゆみ＝聖心女子大学教授・フランス哲学。パリ・ソルボンヌ大学大学院修了。博士（哲学）。著書に『シモーヌ・ヴェイユ』『ムーミン谷のひみつ』など。一九五四年生。

四六判・272頁・3200円
岩波書店
978-4-7664-2690-8
TEL. 03-5210-4111

## 井口　高志著
## 認知症社会の希望はいかにひらかれるのか
### ケア実践と本人の声をめぐる社会学的探究

# 複雑化した認知症の時代的変容を紐解く
### 社会学者の精緻なまなざしがみつめる希望

田島明子

私は現在、大学に勤務する作業療法士であるが、以前は介護老人保健施設に勤めていた。その頃出会った本が井口高志著の『認知症家族介護を生きる　新しい認知症ケア時代の臨床社会学』（東信堂）であった。当時、入居者には六五歳未満の比較的若い年齢で認知症になった方もいて、家族が以前のその方との変化に戸惑いを感じて今後共に生活するか否か迷っている様子に、当たり障りのない対応しか思い浮かばず不甲斐なさを感じたりしていた。その本は家族介護に焦点を当てており、デイサービスなどの外部環境における認知症の人の「人間性」の発見は、家族にとって希望の感覚につながる可能性があると書かれており、認知症作業療法における一つの解答をもらえた思いだった。

その後一〇年を経て、ふたたび著者より認知症を素材に本書が出版され、二点について嬉しい思いがした。一つは、著者の認知症に関わる研究の確かな歩みと厚みを確認できることである。もう一つは、この一〇年程で、認知症の本人の「思い」に触れる機会が増え、作業療法においても支援のあり方は大きく変化しているように感じていたが、この状況をどのように咀嚼し、未来に続く道として拾えるものは何だろうかと混沌とした思いで眺めていた。そこに、著者の精緻な社会学的な分析によって、認知症の本人の声をめぐる過去にさかのぼった現状分析と未来の構想について書かれた本書が現れ、とてもタイムリーなタイミングだったのだ。

さて、本書の紹介を簡単にすると、まず、序章において、医療や福祉の仕事ではない社会学にできることとして、「何もわからない」「多大な負担のかかる」人として認知症の人が扱われてきた時代から、認知症の人の「思い」を発見してきたケアの変化を俯瞰して評価をし、希望の社会を見すえることだとしている。社会学が大変面白いと思うのは、認知症の人の「思い」は何かとは問わずに、「思い」の背後にある時間的な流れや「思い」の発見者によるケア実践の変容から今後の課題と可能性を示そうというその独特なフレームである。

第一章では、認知症の理解と包摂の流れを歴史的なトピックから概観し、第二章・第三章で「思い」のリアリティを担保する家族や支援者などの〈媒介〉の存在と、「語る」と「語らない」「語れない」の分断のリスク、またその「語り」に分断をつなぐ可能性をも示唆している。

終章では、認知症社会の希望をひらく三つの処方箋を示す。一つめは、認知症の人の存在を大事に思いその人が行える活動をぎりぎりまで引き出すこと、二つめは、診断と経験の拮抗関係においてなお、認知症の人の当事者経験を重視することと、三つめは、「進行」をめぐる重要な他者である家族とのやりとりの経験の機微を言葉に乗せ見えるようにすること、である。それらは認知症の後景にいる私たちが示しうる認知症を包摂した新しい社会に向けた希望の根拠になることを最後に指摘する。

本書を読み終えて、自分として何ができるかを考えたい、考えられると思った。本書における熟考を重ねた深い投げかけは、〈媒介〉である私たちが、認知症の人の「思い」を聴き、それに呼応し、何ものかを具現化する、そうした力を私たち自身が備えているという確信の感覚をも同時に与えてくれているように思われるのである。（たじま・あきこ＝湘南医療大学保健医療学部教授・作業療法理論・障害学）

★いぐち・たかし＝東京大学大学院人文社会系研究科准教授・医療社会学・臨床社会学。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士（社会学）。共著に『被災経験の聴きとりから考える　東日本大震災後の日常生活と公的支援』。一九七五年生。

四六判・284頁・2800円
晃洋書房
978-4-7710-3293-4
TEL. 075-312-0788

## 野田　恵剛訳
## 原典完訳　アヴェスタ
### ゾロアスター教の聖典

# 聖典の美しい詩句、「思想の情熱」伝わる
### 本邦初の全訳、イラン宗教の研究史に新たな結実

前田耕作

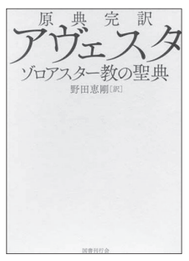
ゾロアスター教の聖典として『アヴェスタ』の名を知らない者はいない。日本語訳の初出は、マックス・ミュラーが編纂した『東方聖典叢書』に収められたThe Zend Avesta（英訳・三巻本）を世界聖典全集刊行会によって上梓（大正九・一〇年・一九二〇・一九二一年）された《世界聖典全集》の第八巻と第九巻に収められた波斯教『アヴェスタ経』（上・下）である。訳者は木村鷹太郎である。彼は「英語からの重訳であるがプラトン全集（冨山房）を日本語にはじめて翻訳した哲学研究者であった」と柳田國男はこの奇才に言及している。木村鷹太郎の『アヴェスタ経』も英文からの重訳であるが、下巻の巻末に添えられた「ゼンド＝アヴェスタ経に就いて」の論考を見ても、その見識が並みではなかったことをうかがわせる。またゾロアスター教は「太古の日本人に知られいたるもの」といい、「神道と密接なりしを察する」と闊達な奇想を披瀝し、浄瑠璃『君屋道満大内鑑』は「ザラトゥシュトラのアヴェスタ」の四分の三は早くに失われてしまい、今日残されているのは讃歌と儀礼の決まり文句、語り、戒律の寄せ集めと評されてきた。確かに今日では完全な形でのアヴェスタというものは存在しない。それでも九世紀にはまだ原典、そこまでは云わぬにしてい『アヴェスタ』の四分の三は早くに失われてしまい、今日残されているのは讃歌と儀礼の決まり文句、語り、戒律の寄せ集めと評されてきた。確かに今日では完全な形でのアヴェスタというものは存在しない。それでも九世紀にはまだ原典、そこまでは云わぬにしてい『アヴェスタ』の四分の三は早くに失われてしまい、今日残されているのは讃歌と儀礼の決まり文句、語り、戒律の寄せ集めと評されてきた。確かに今日では完全な形でのアヴェスタというものは存在しない。それでも九世紀にはまだ原典、そこまでは云わぬにして

完訳『アヴェスタ』出版のニュースはこころ揺さぶるものであった。ゾロアスター教の聖典『アヴェスタ』を原語に基づいて正確に翻訳する試みは、伊藤義教による『原典訳アヴェスター』（ちくま学芸文庫版）や岡田明憲によるヤシュト書やヤスナの抄訳（『ゾロアスター教』、『ゾロアスター教の悪魔払い』、平河出版社）などあり、イラン宗教の研究史に不可欠な大きな足跡を残したが、残念ながらいずれも部分訳にとどまっており、聖典が全訳されたのは本書が初めてである。

訳者の簡潔にして要をつくした解説から読み始め、聖典の美しい詩句の響きのままにしばし読みいれば、イラン宗教の核心をなす『アヴェスタ』の「思想の情熱」（エリアーデ）が伝わってこよう。たとえ「言語が不明瞭であっても、その不透明さは意図的で洗練されたものである」と評したのはデュメジルである。二〇世紀の神話学はいずれも『アヴェスタ』との格闘なしには豊かな稔りを手に入れることができなかったし、いまもなおそうである。ジャン・ケレンスは一九九七年から二〇〇〇年にかけてコレージュ・ド・フランスでヤシュトの解釈をめぐって連続講義をおこなった。そこではバルトロメからロンメル、バンヴェニストやデュメジル、デュセルヌ・ギユマン、ヴィカンデルからヴィデングレン、ゲルドナーからゲルシェヴィッチとフンバッハ、一九世紀末から二〇世紀にかけて『アヴェスタ』に向き合った学匠たちすべてが登場し論及されている。本書の訳者も原典訳の最後に「研究の現状」でこれら学匠の著作を付記してくれている。経典にはもっと詳しい註釈も欲しいが、いずれ別巻が用意されるのであろう。足利惇氏の『ペルシア宗教思想』（国書刊行会）からほぼ半世紀後の新たな結実である。

法隆寺にパフラヴィー文字の刻まれた香木が秘蔵されている。『アヴェスタ』の聖句が放つ霊力によって届けられたともいうのであろうか。

折角の『アヴェスタ』の原典完訳に付された地図がいかにも寂しいのがただ一つの瑕瑾である。（まえだ・こうさく＝東京藝術大学客員教授・ユーラシア思想史）



菊判・648頁・8800円
国書刊行会
978-4-336-06382-3
TEL. 03-5970-7421

## 紹介
### arc（アーク）24号

「革命」という言葉も「変革」という言葉も使い古されたものとして拒否するような、変化への強い志向が感じられる雑誌「arc」の最新号である。

「世の中が一夜でひっくり返るような、そんな変化はない」、「社会の現実そのものは徐々にしか変わらない」と巻頭インタビューで社会学者の上野千鶴子氏は語る。少しずつ、わずかずつ闘いが積み重ねられることで、国民の世論もジェンダーの意識も変わっていく。現在の状況は私たちが作りあげてきたものであり、その抑圧や規制がどんなに強固に感じられるとしても、ケアやジェンダーの視点から社会のあり方を捉え返していくことができるということを教えられる。

重要なのはその変化の中身であり、新たな可能性を追求する現実的な基盤である。経済学者の浜矩子氏は「変えるべきものは何だろう」と問いつつ、コロナ禍が起きる前に私たちがどのように生きていたのかをまず見定める必要があると説く。

写真家の大石芳野氏は新型コロナの感染者に対する差別を問題にしている。自己防衛が行き過ぎると、自分の身を守れなかった者に対する侮蔑や敵意の感情が生まれてしまう。普段は気づかなくても、自分の心にはいろいろな偏見や差別意識が潜んでいる。「もし自分だったら、という想像力を働かせて相手の身になる」という姿勢に立ち返らなければならないと痛感する。（A5判・一六〇頁・一二〇〇円・レイライン社〇四四・七八八・六八一四）

## 近刊セレクト　文化・読物

◇千葉紀和・上東麻子『ルポ「命の選別」　誰が弱者を切り捨てるのか？』（四六・一七〇〇円・文藝春秋・11月30日刊）出生前診断の拡大を利用した「検査ビジネス」、親による障害児の治療拒否など、障害者を取り巻く社会の現状を検証する。

◇嘉村哲郎編・高野明彦監修『アートシーンを支える』（A5・二五〇〇円・勉成出版・11月30日刊）美術館、博物館の事例をもとに、芸術分野でのデジタル対応の現状や問題点を分析する。

◇『デカメロン2020』（B5変・二五〇〇円・方丈社・12月2日刊）イタリアの二四人の若者たちがロックダウンが発令された街を見つめ、言葉を紡いだ貴重な記録。（内田洋子訳・企画）（仮題、予価を含む）


# 法政大学出版局
http://www.h-up.com/

梅澤 礼 著
◎ 2020年 サントリー学芸賞（思想・歴史部門）受賞 !!
**囚人と狂気** 一九世紀フランスの監獄・文学・社会
囚人の社会復帰をめざす理想の監獄とその挫折をめぐって，新聞や学術論文，回想録や文学作品に表れた論争的言説から，犯罪と近代社会の関係を探る稀少な文化研究。　A５判・上製・318頁／5400円

ドミニク・カリファ 著／梅澤 礼 訳
**犯罪・捜査・メディア**
19世紀フランスの治安と文化
秩序を脅かす犯罪者，公権力を担う警察司法組織，そして両者のイメージを創造したジャーナリズムの分析を通じて，民主主義社会の治安の危機を読み解く犯罪文化史。　四六判・上製・358頁／4000円

ゲルハルト・レオ 著／小杉隆芳 訳
**なぜ彼女は革命家になったのか**
叛逆者フロラ・トリスタンの生涯
女は男に従うのが当然だった19世紀のヨーロッパで，虐げられた女性と労働者の解放のために連帯を訴え，社会と闘った作家の人生。画家ゴーガンの祖母でもある。　四六判・上製・320頁／3300円

石原あえか 著
**近代測量史への旅**
ゲーテ時代の自然景観図から明治日本の三角測量まで
ヨーロッパが最新の測地技術で地球を測定し，正確な地図作成をめざした時代を，同時代日本との学術交流と併せて描く。多数の新資料＆未公開図版で辿る科学文化史。　A５判・上製・352頁／3800円

石原あえか 著
**教養の近代測地学**
メフィストのマントをひろげて
望遠鏡，地球儀，プラネタリウム，図化機，航空写真，地震計……。測地学をめぐる科学文化史を，ゲーテ研究者が約250点もの図版とともに物語る。文理融合の快著！　四六判・上製・386頁／3500円

《叢書・ウニベルシタス 1124》
オノラ・オニール 著
加藤泰史 監訳
**理性の構成**
カント実践哲学の探究
カントは人間の自由および人格への尊敬を断固として擁護した。本書は理性・行為・自由に関してカントの倫理学を位置づけ直し実践哲学の新たな可能性を提唱する。四六判・上製・502頁／5400円

井手拓郎 著
**観光まちづくりリーダー論**
地域を変革に導く人材の育成に向けて
魅力的な観光地づくりに向けて地域の人々の意識を変革し，独自の観光資源を活かして事業を成功に導く人材はどのように生まれるのか。
A５判・上製・206頁／3400円

〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-2-3　☎ 03-5214-5540　※ 価格は税別です



# 日本評論社 新刊のご案内
※表示価格は本体価格です。図書目録贈呈D係まで
https://www.nippyo.co.jp/

**法律時報** 12月号
特集 2020年学界回顧
各法領域の学界の動きと得られた成果を回顧する本誌12月号恒例の特集。コロナ禍で各学会が中止・延期となる中でも、歩みを続けた法学研究を照射し、時代に刻む総力企画！　●3,100円＋税

**経済セミナー** 12・1月号
特集 ネットワーク科学と経済学
ネットワーク科学と経済学はどのように結びつき、社会・経済の問題を読み解くことができるのか。分析事例を通して考えてみたい。　●1,380円＋税

**数学セミナー** 12月号
特集 コロナ時代の数学
新型コロナウイルス感染症の流行は、数学者や学生にも日常の再考を迫った。今回は多様な立場からのエッセイを通じて、コロナ禍の現状とそれを切り抜けるヒントを紹介する。●1,090円＋税

**法学セミナー** 12月号
特集 司法は不要不急か？
――コロナ禍における司法の意義と裁判実務
コロナ禍で裁判期日が取り消されたことを受けて、司法は不要不急だったのかを問い、三権分立および裁判実務のあるべき姿を探る。　●1,400円＋税

**摂食障害のすべて**
髙木洲一郎［著］
社会文化的要因、歴史、症状、治療、そして家族療法の重要性、万引きの問題に至るまで、その多様な実態を包括的かつ平易に解説する。　●1800円＋税

**ゲーム理論はアート** 3刷
社会のしくみを思いつくための繊細な哲学
ゲーム理論は、社会のしくみを解き明かすための最強のアプローチだ。コロナ禍でも役立つワクチン配分のマーケットデザインについても紹介！　松島 斉［著］　●2000円＋税

**子ども虐待は、なくせる**
当事者の声で変えていこう
今一生［著］　●1800円＋税
増え続ける一方の子ども虐待。なぜ防止策は失敗つづきなのか。虐待サバイバーのニーズをふまえ、具体的、実践的な対策を提言する。

**物流アルゴで世が変わる**
サプライチェーンの最適化
（オペレーションズ・マネジメント選書）
伊倉義郎・高井英造［著］
難しいビジネス問題を斬新な数理手法をソフトウェア化したアルゴリズムでどう解決するか。物流の世界でアルゴをどう使うか。　●2500円＋税

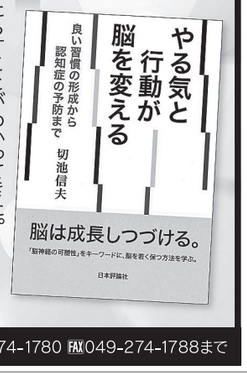
**安保法制違憲訴訟**
私たちは戦争を許さない
平和憲法を死守するために安保関連法制は憲法違反として、25裁判所で訴訟が提起された。裁判の意義と勝訴することの重要性を訴える。　●1200円＋税

**物理村の風景**
人・物理・巨人・追想をちりばめた宝石箱
亀淵 迪［著］
エッセイ集
朝永振一郎に傾倒し、湯川秀樹、ボーア、ラッセルら、巨人の謦咳に接した著者が織りなす四采の衣。　●2700円＋税

**ゼミナール民事訴訟法**
渡部美由紀・鶴田 滋・岡庭幹司［著］
「日評ベーシック・シリーズ民事訴訟法」の著者が、事例問題を素材に一歩進めた考え方を示す。独習またはゼミの教材として最適。●2300円＋税

**一部無効論の多層的構造**
酒巻修也［著］
（青山学院大学法学叢書 第6巻）
裁判官による契約の修正は私的自治の原則とどのように関わるのか。フランス法を素材に日本における一部無効論を再検討する。　●6800円＋税

**やる気と行動が脳を変える**
良い習慣の形成から認知症の予防まで
切池信夫［著］（精神科医）
◎歳をとったからとあきらめない!! 脳は成長しつづける
スポーツや音楽に励み、習慣化することで脳に良い変化をもたらすことがわかってきた。脳神経の可塑性をキーワードに脳に良いこと、悪いことを解説する。　●1900円＋税



〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4 ☎03-3987-8621 FAX03-3987-8590 ※書店にないときは日本評論社サービスセンター☎049-274-1780 FAX049-274-1788まで

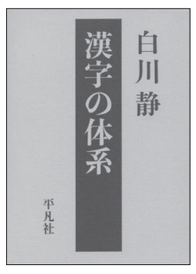
# 文学芸術

## 白川　静著
## 漢字の体系

二〇〇六年に亡くなった白川静氏は、漢字の成り立ちを古代中国の民俗から解き明かす、独自の文字学を打ち立てたことで知られている。その成果は、『字統』に始まる字書三部作などにまとめられ、現在でも参照することができる。本書は、そんな氏が、最晩年に精力を傾注して書き上げた最後の字書である。

一般的な漢和辞典・漢字辞典では、漢字は部首別・画数順に配列される。それに対して、音読みの五十音順配列を採用するのが、白川文字学の字書のスタイルである。一定程度の慣れを要求する部首別・画数順配列に対して、五十音順は誰にとっても引きやすいという大きなメリットがある。しかし、本書ではそのスタイルは採られていない。これには重大な意味がある。引きやすさを犠牲にしてでも伝えたいことが、最晩年の氏の胸中にはあったのだ。

本書の第一部「百科篇」では、「季節」「身分」「祭祀」「農耕」といった六五のテーマで分けて、約七〇〇の漢字の成り立ちが解説されている。人々の生活に密着した切り口を採用することにより、漢字の成り立ちに隠されている古代中国の民俗が、読者により伝わりやすいようになっているのだ。たとえば、「道」には、異民族の首を用いて邪霊を除きながら移動するという民俗が現れているとする有名な字源説は、「道路」の項にある。そして、同じ民俗から「導」「除」「徐」「術」などが生み出されていくようすが、まとめて説明されていく。また、「文身」の項では、入れ墨の風習を窺わせる「文」をはじめ、「爽」「彦」「顔」「凶」「章」などの成り立ちにもその風習が現れていることが、関係性を持って解説されている。白川文字学の核心部分を把握したいならば、今後はまずは本書の第一部を参照するのが有効となるだろう。



四六判・1136頁・8000円
平凡社
978-4-582-12817-8
TEL.0570-045-820

### 精力を傾注した最後の字書
**白川文字学の核心と、『説文解字』の呪縛からの解放**

円満字　二郎

それに対して、第二部「転注篇」では、漢字の「声符」を分類のキーに据えている。声符とは、わかりやすく言えば、部首ではない方のこと。部首をキーとして漢字を捉える伝統的な考え方に、真っ向から反旗を翻しているのだ。

部首とは、一世紀末ごろの中国で書かれた『説文解字』という字書で初めて採用された、漢字分類の方法である。同書は中国文字学では現在でも参照され続けている基本図書だが、なにしろ二〇〇〇年近くも前の書物だ。克服すべき点が多数ある。白川文字学は、『説文解字』という権威への挑戦に終始していると言ってもいい。たとえば、本書第二部の「者」の項では、古代文字の字形から、「者」は悪霊の侵入を防ぐための土の垣だとする。そして、「都」「奢」「諸」などはみなこの意味を有していると説き、『説文解字』の解釈ではそうはいかないと喝破するのだ。この第二部には、約一八〇〇の漢字が二七七の声符によって分類されて収録されているが、その解説からは、『説文解字』の呪縛から文字学を解放したいという強制退去を迫られてきたヒスパニック系コミュニティの住人たちの「痛み」は未知の領域であり、想像に難い。

それでもこの一書のなかで、丹念に伝えられる生活の描写によって詳らかにされる「現実」の一端は、美しい先祖代々の土地を追われ、あらゆるものを「奪われつづけてきた」者たちの「芯のところにある悲しみ」を十全に伝える。

十一の短篇には、実に幅広い時代（一九五〇年代～現代）、年代（小学生から八〇代くらい）の女たちが登場する。

赤ん坊に見立てた砂糖袋の世話をするという奇妙な課題を通して、「運」が「死」を決する理不尽を悟る「シュガー・ベイビーズ」の少女シエラ。

自死した従姉妹サブリナに死化粧をしながら、なぜ誰もが憧れる美人だった彼女が死なければならなかったのかを問い続けるコリーナ。

娘を亡くし孫娘に世話を焼かれる老女パーラ。

「風に揺れる絹のような草が、女が枕にぎゅっと顔を押し付けて寝ているように見える土地、日中は金髪、夜は黒髪の美女だ。」と描写されるコロラド南部の架空の町「サグアリータ」の「美しさ」は、そこに住む者たちが「のみこまれそうな」気持ちになるほどで、コミュニティの女性が本質的に持つ豊かさ、美しさのメタファーでもある。だが、そこに他者の物差しが持ち込まれてしまうと、それは一瞬にして禍々しいものにされてしまうのだ。

女たちに子どもだけ産ませて男たちが去ってしまう物語が多いなか、刑務所帰りの中年女性ニコール（コール）を兄とその息子で十歳のトマス（トミ）が迎え入れる「トミ」が異彩を放って魅力的だ。

富裕層の男へと走ったトミの母ナタリーからトミを守ろうとするコールに信念というほどの覚悟はなかったが、トミもまた本能で実母の虚飾を拒絶し、叔母と甥の不思議な同盟に血が通う。トミから同志と認められたコールがラストで受け取るギフトが温かくて切ない。

為政者が勝手に引いた境界線＝ジェントリフィケーションを、コールは竜巻に例える。だが、なぎ倒される瀬戸際で彼女たち三人は堂々と生きていく。ちっとも幸せそうに見えないナタリーを憐れむコールの記憶に立ち上る父親の言葉は、著者自身のルーツでもあるスペイン語だ。

「ねじれた木の幹をまっすぐにすることはできない。」

それは、たとえ土地を追われても一族が持ちつづける誇り、「同胞たちの不滅の魂」の強靭さを反意的に表しているように感じる。

もっとも、著者は「移民」という語を否定し、「祖先の頭越しに国境が移動した」と喝破している。その定義付けは、彼は、護身のためながら銃で人を殺してしまう。

どの作品でも、ヒスパニック系女性の象徴である「黒髪」が印象的に描かれ、家族や血縁、それらを含むコミュニティ内外で常に生成され続ける対立や差別、しがらみや軋みから生じる悲しみのバリエーションがモザイク画のように置かれてゆく。

## カリ・ファハルド＝アンスタイン著
## サブリナとコリーナ

さまざまな音がページから溢れてくる。食事をする音。家事に追われる音。街角やカーステレオから流れてくる音楽。笑い声。泣き叫ぶ声。おばあちゃんのわめき声に、蛇口から水が滴る音。そこに暮らす者たちがたてる生活音とさざめき。

さまざまなにおいも漏れてくる。シュガークッキーのチーブで甘いにおい。精いっぱい着飾る女たちが纏う人工的な香り。喧嘩のたびに流される、鉄錆びた血のにおい。そして、いたわり合う家族が囲む食卓の、グーラッシュ（牛の煮込み）の温かなにおい。

なんと複雑でつつましく、それでいて彩り豊かな日常だろう。この短篇集には、貧しいながらも身を寄せ合って生きる者たち、とりわけ、さまざまな世代の女たちが抱える痛みと、ささやかな歓びを分かち合う彼女たちの営みが描かれている。

本書でデビューしたカリ・ファハルド＝アンスタインは、これを書くためにどれほど多くの「声」に耳を傾けたことだろう。父母、兄弟姉妹、祖父母、さらにその親たち。友人、近隣住人、先祖代々その土地に暮らす者たち。そして何より、自分自身の奥から響いてくる声。

そんな無数の声が地鳴りのように共鳴し合い、一度ハウリングを起こしたあとの静けさのなかから彼女は筆を執ったのではないか。その時彼女のなかにあったものは諦念だったのか、熾火のようにくすぶる使命感だったのか。

著者が生まれ育ったアメリカコロラド州デンバーは、多様な人種を抱える土地である。人口の三割を占めるとされるのは、スペイン語を母語とする主にメキシコからの移民であるヒスパニック、ラテンアメリカ出身のラティンクス、そしてさまざまな先住民たちとされているが、近年、急速な開発によって彼らは行き場を失っているという。

災害や感染症に慄きながらも、日本でおおむね安穏と暮らしている筆者にとって、「ジェントリフィケーション」と呼ばれる「地域再開発による高級住宅地化」によって強制退去を迫られてきたヒスパニック系コミュニティの住人たちの「痛み」は未知の領域であり、想像に難い。

それでもこの一書のなかで、丹念に伝えられる生活の描写によって詳らかにされる「現実」の一端は、美しい先祖代々の土地を追われ、あらゆるものを「奪われつづけてきた」者たちの「芯のところにある悲しみ」を十全に伝える。

十一の短篇には、実に幅広い時代（一九五〇年代～現代）、年代（小学生から八〇代くらい）の女たちが登場する。

赤ん坊に見立てた砂糖袋の世話をするという奇妙な課題を通して、「運」が「死」を決する理不尽を悟る「シュガー・ベイビーズ」の少女シエラ。

自死した従姉妹サブリナに死化粧をしながら、なぜ誰もが憧れる美人だった彼女が死なければならなかったのかを問い続けるコリーナ。

娘を亡くし孫娘に世話を焼かれる老女パーラ。

「風に揺れる絹のような草が、女が枕にぎゅっと顔を押し付けて寝ているように見える土地、日中は金髪、夜は黒髪の美女だ。」と描写されるコロラド南部の架空の町「サグアリータ」の「美しさ」は、そこに住む者たちが「のみこまれそうな」気持ちになるほどで、コミュニティの女性が本質的に持つ豊かさ、美しさのメタファーでもある。だが、そこに他者の物差しが持ち込まれてしまうと、それは一瞬にして禍々しいものにされてしまうのだ。

女たちに子どもだけ産ませて男たちが去ってしまう物語が多いなか、刑務所帰りの中年女性ニコール（コール）を兄とその息子で十歳のトマス（トミ）が迎え入れる「トミ」が異彩を放って魅力的だ。

富裕層の男へと走ったトミの母ナタリーからトミを守ろうとするコールに信念というほどの覚悟はなかったが、トミもまた本能で実母の虚飾を拒絶し、叔母と甥の不思議な同盟に血が通う。トミから同志と認められたコールがラストで受け取るギフトが温かくて切ない。

為政者が勝手に引いた境界線＝ジェントリフィケーションを、コールは竜巻に例える。だが、なぎ倒される瀬戸際で彼女たち三人は堂々と生きていく。ちっとも幸せそうに見えないナタリーを憐れむコールの記憶に立ち上る父親の言葉は、著者自身のルーツでもあるスペイン語だ。

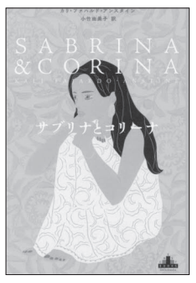
「ねじれた木の幹をまっすぐにすることはできない。」

それは、たとえ土地を追われても一族が持ちつづける誇り、「同胞たちの不滅の魂」の強靭さを反意的に表しているように感じる。

もっとも、著者は「移民」という語を否定し、「祖先の頭越しに国境が移動した」と喝破している。その定義付けは、彼

### 複雑でつつましく、彩り豊かな日常
**どれほど多くの「声」に耳を傾けたことだろう**

八木　寧子



四六変・288頁・2100円
新潮社
978-4-10-590167-7
TEL.0120-468-465

## F・スコット・フィッツジェラルド著／上岡伸雄編訳
## ラスト・タイクーン

フィッツジェラルドという作家の生涯を考えると、妙に哀れを催す。その小説の奥行きは深く、ある意味では二〇世紀アメリカを代表する存在と評価しつつ、彼の生涯の浮き沈みを思い浮べると、もっと多くのすぐれた作品を残していてもよかったと残念でならないのだ。

本書は晩年の長編『ラスト・タイクーン』の翻訳。ただし、一般的には一九四一年に出たエドマンド・ウィルソンが手を加えたものを底本として翻訳がなされてきたが、今回は一九九三年に出版されたケンブリッジ版（未完成の原稿に忠実なもの）を底本として、ウィルソン版も適宜参考にしているという。

細かい異同は専門的になるので割愛して話を進めると、まずこの遺作となった『ラスト・タイクーン』は完成度が低く、誤謬も多いのだが、それだけに一方では作者の意図が反映されていると考えられている。そこで本書では、いくつかの短編（『ラスト・タイクーン』につながるもの）を選んで翻訳し、それらに加えて関連する手紙を翻訳したものが加えられている。

なお、こうした翻訳作品は、フィッツジェラルドが興味を持ち、できれば収入の道としたかった映画産業と結びつくもので、中でも特にハリウッドの伝説的映画製作者アーヴィング・サルバーグとの交際が深く関わっていた。本書の最初に置かれた『ラスト・タイクーン』中のエピソード、セクション群に加えて、「ハリウッド短編集」としてまとめられた四つの短編は、フィッツジェラルドが関わった、あるいは垣間見た映画世界の一端の数々を伝えるものだが、それらに加えて「ハリウッドからの手紙」と題された二〇以上の手紙も興味深いエピソードを提供してくれる。

編訳者のすぐれた翻訳は言うに及ばず、その解説も複雑な状況を見事にまとめていて、フィッツジェラルドに興味を持つ人々、あるいはこの作者の世界を研究する人々に豊かな世界を提供するものとなっているのは喜ばしい限りである。

しかし、一読者として本書に接する人間には、実はそうした感慨とは異なる思いが心に浮かぶのも事実なのである。第一に、「第一章」と題された部分に収められた多くのエピソードが、まるで映画の断片的な場面のごとく、しかも前後の脈絡を抜きにして提示されていること、これは読む側にとって、正直に言って辛い体験だった。なるほどそこに描かれた場面が解説されれば、一応の理解を得られる。あるいは、映画のシーンとはそういうもので、映像を通じて観客に必要な情報が与えられるのかもしれないが、活字を通じて伝えられる世界は妙に断片的であるのも事実なのである。

では、こうした場面が短編小説になればどうなるのかと言えば、もちろん物語の世界が少しは広がっていき、特に「クレージー・サンデー」と題された作品には小説としての魅力を感じさせるものがあったことは言うまでもない。あるいは最後にまとめられた「ハリウッドからの手紙」では、テッド・パラモア宛には、この共同執筆者である脚本家への容赦のない意見が現れていて、フィッツジェラルドの肉声を聞いたような思いにとらわれた。

それにしても、このフィッツジェラルドという作家とハリウッドの映画世界とは縁遠いものだったのではないだろうか。そう考えると、妙に切ない思いにとらわれて仕方がないのである。（こばやし・あきお＝上智大学名誉教授・英文学）

★F・スコット・フィッツジェラルド（一八九六―一九四〇）＝ヘミングウェイ、フォークナーらと並び、二〇世紀前半のアメリカ文学を代表する作家。一九二五年に二〇世紀文学を代表する傑作『グレート・ギャツビー』を発表。その後は派手な生活を維持するために短編小説を乱発し、才能を擦り減らしていく。一九三四年、長編『夜はやさし』を発表するも売り上げは伸びず一九三〇年代後半からはハリウッドでシナリオを書いて糊口をしのぐ。死の翌年、遺作となった未完の長編小説『ラスト・タイクーン』が刊行された。

四六判・414頁・2800円
作品社
978-4-86182-827-0
TEL.03-3262-9753

### 何だか切ない本
**作者の意図が反映された晩年の長編と関連する短編、手紙**

小林　章夫

## 近刊セレクト　文学芸術

◇蔵持不三也監『世界でいちばん素敵な神話の教室』（A5・二五〇〇円・三才ブックス・12月4日刊）ギリシャ、北欧、ケルト、中国など洋の東西を問わず教養として知っておきたい「神話」の世界を美しい写真や西洋絵画とともに紹介。

◇キム・チョヨプ『わたしたちが光の速さで進めないなら』（四六・二〇〇円・早川書房・12月3日刊）韓国科学文学賞佳作を受賞した表題作をはじめ、疎外される少数者に温かい視線を送る女性視点のフェミニズムSF短篇集。全七篇収録。（カン・バンファ、ユン・ジョン訳）

◇日本劇作家協会編『優秀新人戯曲集2021』（A5・二〇〇〇円・ブロンズ新社・12月7日刊）第26回劇作家協会新人戯曲賞に応募された作品の中から、最終候補として選ばれた6作品を完全収録。（仮題、予価を含む）

## 連載　「自由」と肉体性
**ジャン・ドゥーシェ氏に聞く(179)**

HK　現代の美術や演劇などを鑑賞していると、生身の身体を見せつけられる機会が非常に多いことに加えて、人間の身体とは何かを考えさせる作品も多いですね。例えば、ハイパー・リアリズムのようにして、必要以上に身体性を強調する作品があります。それとは反対に、幻肢など目に見えない身体を取り扱っているものがあります。存在していない人の写真を並べたり、大量の靴だけを展示したり、存在を示唆する類いのものもあります。そこからは、二つの傾向が見て取れます。一方では、身体を露出させることで、見ている人の身体に対する認識が変わる。もう一つは、見せないものを見せようとすることで、何かを呼び起こそうとする。今日の映画を見ていると、偉大な映画の歴史を持たない国の映画作家は、映画を通じて自国の語られなかった記憶を探っている印象を受けます。

JD　それは映画だけではなく、文学や演劇でも同じことが言えます。多くの国では、検閲などのせいで、言いたいことが言えない状態にあったのです。今日では、以前ほど検閲が力を持っていません。だから、彼らは自分たちの語りたかった歴史を語り始めたのです。

HK　記憶の再構成を試みる映画を目にするたびに、映像の力が失われてしまったように思えます。例えば、バルベ・シュローダーやマルセル・オフュリスの映画には、被写体の強さがあります。しかしながら、今日の多くの映画作家の映像には、ドキュメンタリーであってもフィクションであっても、力強さが見えてきません。ユルマズ・ギュネイは何度でも見たくなりますが、他のトルコ映画は自主的に見たいとは思えません。

JD　ギュネイを、他の作家と一緒にすることはできません。彼は、映画のせいで、刑務所に入れられていました。そのような人が作る映画が、他の人と同じであるはずがありません。彼は、実際に起きたことを、身をもって知っているのです。

HK　セラの『自由』には、この上なく肉体が見えました。物体としての肉体ではなくて、ギュネイの映画で見えてくるような肉体です。僕の意見では、セラの映画では「肉体」が主題となっている。そこには身体としての物質的な「肉体」と、宗教的な意味での「肉体」の二つが関わってきます。『自由』においては、性器を見せたり、肉体を痛めつけたりしますが、楽しんでいるとは思えません。どちらかというと、受難のようにして、辛いものに見えます。ただ、音の使い方などのおかげもあり、映画の演出はうまくいっている。

JD　セラの映画に「肉体」を見るのは、悪くない見方です。彼は、東方の三博士とキリストの生誕の映画（『鳥の歌』）を作っていました。

HK　セラは、ブニュエルと同じく、イエズス会教育法を受けたことがあるそうです。

JD　そうした経験があったのならば、その後の人生に大きな影響があるはずです。

HK　セラは『私の死の物語』において、死をテーマにしていました。何度も見ているのですが、シナリオがうまく書かれていないからか、あるいは見る側の問題で、映像にだけ目がいっているからか、カサノヴァとドラキュラの繋がりがよくわかりません（笑）。しかし細部に目をやると、多くのものが見えてきます。たとえば口を真っ赤にしながらザクロを食べるシーンがあります。かりにギリシャ神話の知識があれば、すぐさまペルセポネーと冥界の関わりが思い出されます。さらにドラキュラの口も想起される。優れた演出だと思います。たとえ、そうした知識がなかったとしても、純粋に映像の強さだけでも目をひきつけます。同じく『自由』も、映像だけを楽しむことになりました。正直なところ、公開直後に映画館に駆けつけたのですが、ヘルムート・バーガーが出演していることが頭の中から抜け落ちてしまって、彼がどこにいたのか確認するために二度見ることになりました（笑）。

JD　ヘルムート・バーガーは、まだ亡くなってなかったのですか。

HK　映画に出ることは稀ですが存命です。

JD　いずれにせよ、彼はヴィスコンティ以降にまともな活躍はできていない（笑）。

〈次号へつづく〉

〔写真はグザヴィエ・ボーヴォワ監督『マチューの受難』出演時のドゥーシェ（左端）〕

（聞き手＝久保宏樹／写真提供＝シネマテーク・ブルゴーニュ）

## 読書評　チャンパス
## 大学生がススメる本
### 内藤正典著『となりのイスラム』
**共立女子大学　二宮　響子**

四六判・256頁・1600円
ミシマ社
978-4-903908-78-6
TEL.03-3724-5616

イスラームを信仰する人々をムスリムという。彼らは、唯一神アッラーに全てを委ねる。特定の信仰を持つ人の多くない日本で暮らしていると、宗教と深く関わる機会は少ないかもしれない。しかし、イスラームを理解することは、多くのムスリム移民が暮らす現代日本にとって有益であることは疑いようがない。しかしながら、目につくのは、テロリズムなどの負の側面ばかりである。なぜ暴力による応酬が続くのかということにとどまらず、報道では目にすることの少ないイスラームやムスリム自身の性格を知りたいと思い、この本を手に取った。

長年、ムスリムや欧州に移住したムスリム移民と対話を重ねてきた著者は、彼らをこう捉える。「線引きをしない人々」であると。線引きをしないとはどういうことかを知るために、まず線を引くということについて考えたい。ムスリム移民の視点を通して西洋社会を見つめると、線を引くとはまさに、世俗主義を採用した西洋的近代化の歴史である。世俗主義とは、宗教と政治に線を引くことであり、それによって社会を進歩させてきたのだ。加えて、植民地に線を引き、緩やかな共同体であった地域を一方的に分断したのも西洋の歴史である。

現代社会の深刻な問題であるイスラム国。著者はこの組織を、「イスラムの病」であるとする。もともとは国境などなく、様々な宗教や民族が共に暮らしてきた中東・イスラーム社会。そこに生きてきたムスリムの生活が、国境という線引きによって奪われてきたことで、この病が深刻化した。イスラム国は、独自の線引きによって、その主張に反する者全てを敵とみなす。そして、線の外側に対しては、非人道的な暴力に訴える。彼らは、線引きをしないイスラームの伝統に徹底的に反している。テロリズムとの戦いは、イスラームとの戦いではないのである。

それでは、線引きをしないムスリムとはどういった人々なのだろう。神と共に生きることこそが人生であると考えるムスリムは、全てを神に委ねる。これこそ、イスラムが世界に多くの信徒を持つ所以たる「救い」なのである。例えば、夫婦が子供を授かるか否か。こういったことも神に委ねられている。そのため、夫婦に子がいるかいないかによって、他人が評価をすることはない。子のいない夫婦がしばしば肩身の狭い思いをさせられる日本には、この様な考え方が参考になると著者は言う。本書の面白いところは、このように、日本人の視点を常に意識している点にある。友人との交流や研究を通してイスラームを体感してきた著者の体験談を読んでいると、物理的には遠いはずのムスリムの生活を垣間見ているように感じられる。

しかしながら、ムスリムという言葉で彼らを十把一絡げに定義してはならない。神の教えに忠実な人もいれば、ある部分では世俗化している人もいるからである。神と対峙するのはあくまで個人であり、他人に促されるべきことではない。つまり、線引きをしないのも、神に全てを委ねるがゆえなのである。

著者はまるで読者のとなりにいるかの様に語りかける。読者と自身の間に線引きをしないことで、線を引かないということを実践しているように思う。おそらく、ムスリムと非ムスリムを分けて考える必要はない。互いのあり方を、双方がそのまま認めれば良い。信仰や国籍に関係なく相手を尊重することこそ、線を引かないということなのだと思う。

★にのみや・きょうこ＝共立女子大学国際学部2年。展覧会へ行ったことをきっかけに、木版画を始めました。今は葉書サイズですが、いずれは大きな作品に挑戦したいです。

役に立つ人間になるためには
まず自分を磨くことだ
そのために多くの書を読んでいこう
伸びていこうとする若い人を私たちは応援します
三井住友銀行グループ
SMBCコンサルティング

# 学術文学

## ジョン・アレン著 美食のサピエンス史

本書を読んで、ヒトは「食べる」動物だとあらためて思う。もちろん食はあらゆる動物に共通する行為なのだが、彼らの食は単に環境資源の身体資源化である。それを「身体で食べる」ことだとすれば、それに比べてヒトは「脳・心で食べている」。そこには文化が広く深く関わっており、それがヒトの食を独自なものにしている。これが本書の通奏低音である。

著者のジョン・アレンは神経人類学者として、進化から文化、脳機能イメージングまで縦横に筆を走らせ、ヒトの食がいかに学際的な裾野を持つ複合的かつ重要なテーマであるかを豊かに示している。まず冒頭、食にサクサク感を求めるのは人類共通の性向であるとして、霊長類としての祖先が昆虫を好んで食べていたことの名残ではないか、という意表をつく仮説から始まる。この出だしのあと、ヒト化の進行にともなう植物食から肉食への変化、狩猟と脳の大型化の関連というオーソドックスな進化学的議論が続き、それがヒトの食における脳の関与の重要性の伏線ともなっている。

この問題は火・道具の使用、さまざまな食材の取り込みと雑食化、手順と分類による調理、その記録としてのレシピや料理のメニュー、儀式……といったようにどんどん展開する。チンパンジーのアリ釣り行動のように、動物の文化的行動としての道具使用は食と結びつくことが多いが、ここで著者はヒトの食が文化による食の多様化としての「超雑食性」であるという新たなアイデアを提出する（ちなみに、本書の原題は「The omnivorous mind（雑食性の心）」である）。

食のレパートリーの拡大はヒトの生息圏の拡大を可能にし、また生息圏の拡大がさらに超雑食性を強めた。農耕・牧畜は、環境と食の関係性の一層の自由度拡大であろう。また食の多様性は、なにも食べるものの種類や食べ方が増えるというタブーなど、さまざまな価値をともなうことでもある。皆で食べることが集団・家族の集いの記憶となり、宴が仲間意識の確認に使われたり、逆に教などの場でのルール・食が異集団排斥の媒体になったりもする。これを言語が支え、それを背後で統合するのが脳であるという主張である。

ただ単に食べるのではなく、いやがうえにも美味しさを追求する動物がヒトなのである。その意味でタイトルを雑食でなく美食としたのは名訳だと思う。しかし食には実肥満、糖尿病、高血圧、高脂血症、心臓病、癌など、その例には事欠かない。その悪弊を予知してあえて禁欲的に食を控えることや、健康増進のため不味なものを我慢して食べることもヒトの食の特徴である。

ヒトの食を考える場合、食の多様化とは逆の大量生産・大量消費・画一化などを特徴とする「マクドナルド化」も顕著である。その一方で、世界各地の飢餓に瀕する人々に食糧支援をしている国連世界食糧計画（WFP）に今年のノーベル平和賞が贈られたことが示すように、人類の食糧事情はますます深刻化している。グローバルに人類の未来を食と結びつければ、喫緊の課題として人口爆発・資源枯渇・環境汚染といった諸問題を忘れるわけにはいかない。この延長線上には、間違いなく美食とは異次元の食の未来図が待ち受けているが、そういったヒトにおける食の困難さのテーマは残念ながら本書では取り上げられていない。

この本は、掲載された図表がすべて脳のイラストであったことが象徴するように、脳科学に基礎をおいたヒトの食文化のエッセイである。著者は最後に心理学の「心の理論」にならい、食という認知・行動システムとして「食の理論」を提唱し、またその発達にも軽く言及している。このような食の近未来における地球規模の難問に対して、はたして食の理論はいかなる打開策をもたらしてくれるのであろうか。（成広あき訳）（ねがやま・こういち＝早稲田大学人間科学学術院教授・発達行動学・動物行動学・発達心理学）

四六判・308頁・2200円
羊土社
978-4-7581-1214-7
TEL.03-5282-1211

## 脳科学に基礎をおいた食文化のエッセイ

### 「身体で食べる」動物と「脳・心で食べる」ヒト

根ヶ山光一

★ジョン・アレン＝人類学者。南カリフォルニア大学のドーンサイフ認知神経科学イメージング研究所、および同校脳・創造性研究所、インディアナ学人類学部の研究員・ヒトの脳構造と進化。日本、ニュージーランド、パプアニューギニア、パラオで文化人類学のフィールドワーク経験がある。

## 神沼 克伊著 あしたの南極学

### 極地観測から考える人類と自然の未来

本書の冒頭で、合計五年ほど観測で過ごした南極が「極楽」だったことに気づいたと著者は書く。この言葉が忘れられない。なぜかと考えてみた。南極に足を踏み入れたことのない評者にとって、南極が「極楽」か「地獄」かと言われれば、どちらかというと、苛烈なブリザード、茫漠とした氷原が頭に浮かび、ついつい「地獄」を連想してしまっていたからだ。恥ずかしながら、評者はアラスカの亜極北の森林地帯や極北のツンドラに滞在した経験をもつ文化人類学徒であるが、同じ極地にあたる南極についてまったく浅はかな理解をしていたことに本書を読んで気づかされた。

南極の地質や自然に詳しい著者がひも解く南極学の世界は豊かでいながら、数式アレルギーのド文系の私でもスラスラ読める語り口である。南極の裸氷域には隕石が落ちており、南極観測を通じて隕石を収集してきた日本は世界有数の隕石保有国であるとか、一九八〇年代～九〇年代に耳目を賑わせたフロンガスが原因でできるオゾンホールは昭和基地で（その原因は不明のままであったんど水中から出て氷の上にいました。するとそのうちの一羽が私の方に歩いてきます。体全体を振るようなユーモラスな歩き方でやってきます。じっと立っていましたら、目の前五メートルほどのところで、立ち止まり、じっとこちらを見ているのです」。南極の沿岸でコウテイペンギンとにらめっこするなんて、きっと一生忘れられない経験である。

本書のもうひとつの特徴は、南極での生活に関してベテラン滞在者の観点から教えてくれていることだ。観測が始まった初期の昭和基地では、電報がおもな日本との連絡手段だったため、略号や暗号を使ってできるだけ短い字数で日本に残した家族とコミュニケーションしていたという記述もある。往時の工夫が当事者の視点で語られているのは貴重である。一九七〇年代になると、食料事情もよくなって、フィレステーキが出されていたが）いち早く観測されていたこととか、長年の経験に基づいた興味深い話がちりばめられている。本書でたまに登場するペンギンも、突然彼らの世界の隣人となった人間たちに興味津々の様子である。「気が付くと二〇～三〇羽のペンギンがほとんど水中から出て氷の上にいました。するとそのうちの一羽が私の方に歩いてきます。体全体を振るようなユーモラスな歩き方でやってきます。じっと立っていましたら、目の前五メートルほどのところで、立ち止まり、じっとこちらを見ているのです」。南極の沿岸でコウテイペンギンとにらめっこするなんて、きっと一生忘れられない経験である。

本書のもうひとつの特徴は、南極での生活に関してベテラン滞在者の観点から教えてくれていることだ。観測が始まった初期の昭和基地では、電報がおもな日本との連絡手段だったため、略号や暗号を使ってできるだけ短い字数で日本に残した家族とコミュニケーションしていたという記述もある。往時の工夫が当事者の視点で語られているのは貴重である。一九七〇年代になると、食料事情もよくなって、フィレステーキが出されていたという。さらには、最近コンビニでみかけるあの「悪魔のおにぎり」はオーロラ観測や機器の保守点検のために夜勤する隊員の夜食として出されたのが始まりであったらしい。もちろん、初期の頃には「コンビーフのすき焼き」が供されたなんて話も出てくるが、南極観測隊が檜の浴槽で風呂を浴びた後、ソフトクリームを食べたり、バーで一杯ひっかけていたりとは想像もしていなかった。著者が何度も指摘するように、南極観測はすでに還暦を迎えた調査事業であり、いわゆる「冒険」として理解してはいけない部分がある。もちろん、観測は決して楽ではなく、プリザードによって視界を奪われる恐怖、一歩間違えば隊員全滅も生じかねない基地での火災など、気をつけなくてはいけない点も本書はぬかりなく示してくれている。

著者が南極を「極楽」と呼んだひとつの理由は、南極条約によって各国による領有権は凍結されており、研究者がビザなしで自由に大陸内を移動できる「政治的パラダイス」であるからだ。しかし、現在条約で規制されている地下資源の採掘は二一世紀の半ばには規制が解かれる可能性がある。南極は資源をめぐる新しい国際政治の駆け引きの場となるのだろうか。著者曰く、「自然にやさしく」はおこがましい考えであり、「地球にやさしくしてもらう」ことを目指すにはどうしたらよいか私たちは考えるべきだという。評者の調査地である北極域では資源採掘が盛大におこなわれている姿をみて、考え込んでしまった。「地球に甘える」のではなく、「地球にやさしくしてもらう」ために私たちは何ができるのか、と。これは次代の極域研究者に課された大きな宿題であろう。（こんどう・しあき＝神戸大学大学院国際文化学研究科講師・文化人類学・北米先住民研究）

★かみぬま・かつただ＝極地研究家・国立極地研究所ならびに総合研究大学院大学名誉教授・固体地球物理学。二度の越冬を含め南極へは一五回赴く。南極には「カミヌマ」の名前がついた地名が二箇所ある。著書に『地震の教室』『次の超巨大地震はどこか?』『白い大陸への挑戦』『南極の火山エレバスに魅せられて』『あしたの地震学』など。一九三七年生。

四六判・282頁・2200円
青土社
978-4-7917-7312-1
TEL.03-3294-7829

## 宇田 和子著 ブロンテ姉妹の食生活

### 生涯、作品、社会をもとに

## 南極という「極楽」

### 極地を半世紀以上にわたって見つめた地震学者の集大成

近藤 祉秋

## 『嵐が丘』の作者や登場人物は何を食べていたのか

### 伝記的研究から始まる食生活研究と文学研究

田中 淑子

『ジェイン・エア』、『嵐が丘』、『アグネス・グレイ』の作者であるブロンテ姉妹や登場人物は何を食べていたのだろう。本書がこの質問に答えてくれる。本書は言わば〈食〉で読むブロンテ姉妹である。著者の宇田氏は食べることは人間の文化的営みであるばかりか、社会問題にも有機的に関わっていると捉えている。食の研究が文学研究へと繋がったのは、料理好きが高じて製菓衛生師の資格をもつ英文学の専門家である宇田氏ならではの業績である。

八章の構成である。第一章「ブロンテ家の時代」に於いては、姉妹が活躍したヴィクトリア朝時代には植民地拡張により異国の食物が豪華に食卓に並んだが、「基本的にはブロンテ家の家庭食は召使の作るヨークシャー料理」であったと指摘される。しかし、家庭教師の勤務先、ロンドン、ベルギーに出かけた姉妹は様々な食事を知っていたと断っている。第二章では父パトリックが紹介される。子供たちに「肉を食べさせなかった」とギャスケルの伝記に記述された奇行を、宇田氏は日誌や使用人の証言から誤りではないかと推測し、健康な食事に腐心した父親像を浮き張りにする。第三章では、死去した妹の家族を助けるために牧師館に来た伯母エリザベス・ブランウェルがビール作りをしていたことや、遺産を通して姉妹の小説出版に貢献したことが指摘される。しかし、資料が少なくブロンテ研究において彼女に一層の光が当たることを望んでいる。第四章では一人息子で前途を嘱望されていたブランウェルの挫折を通して、飲酒の問題が検討される。アルコール中毒により絵画と文学の才能を消耗させた彼の姿は姉妹の創作に影響を与えた。第五章は、今までに関心を向けられなかった召使たちが作る料理や台所用品が紹介される具体的で興味深い章である。第六章は「食でみる『ジェイン・エア』」を扱う。主人公の移動する五ヶ所の食生活を追いながら彼女の成長を考察する。宇田氏はその遍歴を「でんぷん主体からタンパク質へ」と捉えて、居候で食べない子が、結末では幸せな結婚をして鶏を食する姿を描き、食の変遷が愛ある家庭の形成という作品のテーマと密接に関連していると分析する。第七章のエミリは、パン作りの名人である一方で、社交を嫌い牧師館と周辺の荒野で世俗から超然として生きた。その特色は『嵐が丘』にもみられる。食事風景がリアルに描かれる一方で、主人公たちは魂の自由と孤高を守るために絶食するという超越性を示し、それら二つが不思議に共存するとした卓見である。第八章の『アグネス・グレイ』はアンの家庭教師の経験をもとに書かれた。食事が登場人物の人柄や道徳観の判断基準となり、現実の中で勤勉や道徳を重視し自立するヒロインが描かれる。

英国北部の貧しい牧師館で営まれた家族の伝記的研究から始まる食生活の研究と文学研究は、多くの図版、写真、表、レシピなどを交えて分かりやすい。伝記の部分の重複が気になるが、読者に親切で読みやすい本である。（たなか・よしこ＝元川村学園女子大学教授・英国小説）

★うだ・かずこ＝埼玉大学名誉教授・英語文学・イギリス小説・文化。著書に『私のネパール菓子』『ブロンテと芸術』『シドニーのそれぞれ楽しいご飯たち』など。

A5判・248頁・2200円
開文社出版
978-4-87571-883-3
TEL.03-3358-6288

## 新刊

## 北原 尚彦著 初歩からのシャーロック・ホームズ

北原さんの名前は、ホームズ好きであれば一度は目にしたことがあるかもしれない。『シャーロック・ホームズの蒐集』『シャーロック・ホームズ語辞典』の著者であり、キム・ニューマン『モリアーティ秘録』の翻訳者である。その北原さんによる「ホームズ案内書」が刊行された。

『緋色の研究』で登場したシャーロック・ホームズは、今や名探偵の代名詞的存在である。現在でもなお、たくさんのパロディやメディアミックスがなされ、新たなホームズが誕生している。では、原作はどうなっているのか? そんな疑問を抱いた人にこそ、一読してほしい。

各登場人物の紹介に始まり、ホームズが活躍した時代と地理から作品背景を論じ、作者ドイルの解説……。どこから読んでも楽しめるが、「今からシリーズを読もう」と考えている人にとって、第一章は重要である。原作（ホームズ作品の場合は「正典」と呼ばれる）を読む順番や、多数ある翻訳書のどれを読むべきかが記されている。できるなら読む前に知りたかった……!と多くの読者が思う情報である。

一通りホームズ作品を知っている人には、第六章がおすすめだ。この章では、ホームズのパスティーシュやパロディ作品、研究書が次々に登場する。こんなにパロディがあったのか、と驚いてしまった。ベイカー街221Bの階段が何段だったか思い出しながら読むのも悪くない。その際は「まえがき」を後から読む方がいいだろう。（新書判・二四八頁・八八〇円・中央公論新社☎〇三・五二九九・一七三〇）

読書人 単行本第3弾
映画評論家 蓮實重彦氏推薦！
ディアローグ デュラス／ゴダール全対話
DURAS/GODARD DIALOGUES
マルグリット・デュラス
ジャン=リュック・ゴダール
シリル・ベジャン編／福島勲訳
これまで一部のみ翻訳されていた、デュラス／ゴダールの3つの対話を、マルグリット・デュラス・アーカイブ、並びにフランス現代出版史資料館のマルグリット・デュラス寄贈資料に残る音声資料から完全再現。ほぼ全頁にわたって詳細な註を付す。知られざるゴダールとデュラスの真実。
四六判並製・214頁 本体2800円＋税
関連既刊 映画時評集成 2004-2016 伊藤 洋司 著 2300円＋税

名文による人生案内！
中学生までに読んでおきたい
哲学
松田哲夫 編　案内人 南 伸坊
［全8巻］
考えることを楽しもう！
★わかりやすい図版脚注つき★
「哲学」は、哲学書や哲学講義のなかにだけあるものではありません。私たちの日常の暮らしの中にも、また、気楽に読んでいる文章の中にも、考えるためのヒントはちりばめられています。このシリーズでは、多彩な書き手による、味わい深い文章が並んでいます。優れた文章を味わうのもいいし、哲学的な思索にふけり、自分の頭で考える訓練を積み重ねるのもいいと思います。
（編者 松田哲夫）
シリーズ14万部突破！
❶愛のうらおもて
向田邦子「ゆでたまご」
杉浦日向子「恋人の食卓」
森 瑤子「手紙」
寺山修司「愛され方」
吉行淳之介「嫉妬について」
など、19編を収録。
❷悪のしくみ
井上ひさし「万引き」
池田晶子「いじめの憂鬱」
星 新一「七人の犯罪者」
堀田善衛「流血」
吉野せい「いもどろぼう」
など、18編を収録。
❸うその楽しみ
幸田 文「うそとパン」
柳田国男「ウソと子供」
井伏鱒二「うそ話」
米原万里「北風と太陽」
遠藤周作「嘘」
など、19編を収録。
❹おろか者たち
山口 瞳「すみません」
梅棹忠夫「遅刻論」
中島らも「怒る子は育つ」
三島由紀夫「虚栄について」
佐野洋子「虹を見ながら死ね」
など、21編を収録。
❺自然のちから
宮沢賢治「やまなし」
今西錦司「山」
湯川秀樹「自然と人間」
日高敏隆「いろんな生き方があっていい」
開高健「瞬間の大河」
など、18編を収録。
❻死をみつめて
松下竜一「絵本」
伊丹十三「死教育」
吉村 昭「大人の世界」
神谷美恵子「自殺と人間の生きがい」
阿佐田哲也「自殺について」
など、18編を収録。
❼人間をみがく
須賀敦子「ほめる」
白洲正子「人間の季節」
河合隼雄「人の心などわかるはずがない」
森 毅「わらじは二足」
小松左京「再建」
など、21編を収録。
❽はじける知恵
高峰秀子「文章修行」
茨木のり子「美しい言葉とは」
渡辺一夫「教養について」
城山三郎「大志信仰／人間通の勝利」
岡本太郎「『岡本太郎の眼』はじめに」
など、19編を収録。
●各巻定価（本体1800円＋税）A5変型判／略フランス装／平均256ページ
そうか、哲学って、小難しい理論じゃなくて、私たちの生活のすぐ隣にある何かだったんだ。考えるって、こういうことだったんだ。
角田光代さん
イラストレーション＝南 伸坊
あすなろ書房 〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町551-4 Tel:03-3203-3350 Fax:03-3202-3952 http://www.asunaroshobo.co.jp ★お買い求めの際は、お近くの書店へお申し込みください。

# 日常の向こう側

ぼく　横尾忠則

No.468

## 自転車断捨離、ただ原始人のように歩く

**2020.11.16**　2日間食欲なし。玉川病院へ。主治医の中嶋名誉院長曰く、「断食療法だと思えば食欲がないことはいいことだ」と。かえって腸と胃の粘膜を安静に休めるのでよい。今、体調が悪いのは便秘薬のために躰のリズムを崩した。アイスクリームしか食べたくないのは空腹時の口の粘膜が糖分や冷たいものを欲求、理にかなっている。断食療法はナトリウム、カリウムなどの塩分とエネルギーを補給して躰をもとに戻していく。糖尿には貧しい少年時代を過ごした人は滅多にならない。胸焼けをするのは胃と食道の境目が少し緩んでいるせいで全然大したことない。骨折後の足の裏の肉玉の違和感は自宅で裸足で歩くと感覚が戻る。「横尾さんの肉体は近代的ではなく、原始的なので、元に戻って原点に帰ることが治療に繋がる」。洞窟画でも描くか。

夜、おかゆと梅干。処方された胃薬服用。

**2020.11.17**　朝変らず食欲なし。昼、好物のうなぎを摂るが、信じられないほどまずい。食べない。ふとコロナ感染を疑う。

午後玉川病院へ。血液検査。2人の先生のWチェック。炎症数値やゝ高い。病気を引き起こす強い炎症の数値は5以上。問題なし。尿検査もCT検査も問題ない。コロナ感染はCTに表れるが、当然陰性。食欲のないのは便秘薬を飲むと力リウムがなくなるので躰がだるく、食欲が無くなる。体力が落ちているので500ccの点滴でエネルギーとビタミンを体内に補給。3日ぐらい入院して詳しい検査もできるが個室はコロナ患者のため空室なし。

浅田彰さんより田中康夫さんが舌出マスクをつけて、色んなメディアに出没の写真が届く。

夜は好物のぜんざい。食欲出る。

**2020.11.18**　昼は好物のふかひれそば。

愛知県美術館の南さん、都現美の藤井さん来訪。50項目以上の質問。疲れた。

玉川病院へ。少し過剰かも、と言って点滴に抗生物質を入れる。快復のきざし。明日は点滴なし。

食欲がでてきたので、夕食は自家製カレー。

**2020.11.19**　産経新聞の依頼で三島由紀夫さんの文寄稿。

昼、テイクアウトの寿司。食欲回復。結局今回の体調不調の原因は下剤ではと自己診断。

**2020.11.20**　食欲が出てきた。自転車を断捨離したので、ただ原始人のように歩く。昼は好物のふかひれそば。夜はやはり好物のお好み焼を昨日に引き続いて。

終日、これという仕事もせず、ぼんやり、無為の時間の中で、描きかけの絵を夢想する。

**2020.11.21**　〈海の見える名門ゴルフコースに出ている。コーチの指導で3発打つが、3発目が、とてつもなく高く、遠くへ飛んでいった。上昇気流にでも乗ったのか、落下の気配もなく、ただただ上空を流れるように「飛行」する。この勢いで飛ぶとアメリカの軍事基地まで届くという。そうなった場合、戦時体制に入るかも知れない〉という夢。この間から、戦争に関する夢を見続ける。

自転車の断捨離は生活と躰に革命を起こす。

神戸屋まで歩いて、ハンバーグとステーキのミックス昼食。店内空間が広くてカスカスだからコロナはあってないようなもの。

夕方、萩原さんの訪問マッサージを受ける。

**2020.11.22**　〈篠原有司男さんが帰国して友人を沢山集めて田舎家で散財をするというので招かれているが、やゝっこしい場所らしい。バスの車掌さんに聞くが、ますますわからない。親切に教えてくれた美人の車掌さんだから、まッ、ええか〉。この間も、ギューちゃん（篠原の愛称）の夢を見た。知人だが、友人とは言えない関係性。

食欲が回復したものの、まだ、不十分。無理は禁物。努力、意欲、好奇心は敵としなければならない。この年齢になると、このようなものが持つエネルギーは何の役にも立たないことを知らなければ寿命を縮める。

コロナ感染者拡大の一方。にも関わらず、さほど一般市民は深刻さがないのはテレビの演出か？トラベルとイートの番組の横行が視聴者を麻痺させてはいないか？

今夜は日本シリーズの第二夜。巨人のユニフォームに過去の伝統から脱却できない、そんな呪縛を感じませんか？

米国のWhitewall誌のためのインタビューをメールで答えて返送する。（よこお・ただのり＝美術家）

玉川病院名誉院長、中嶋昭先生と（撮影・徳永明美）

## 受賞

十一月八日都内にて、株式会社マガジンハウス主催「ananAWARD」の授賞式が初開催された。『anan』創刊五〇周年を記念し立ち上げられたこの賞は、時代を象徴するスターに贈呈される。第一回の受賞者は以下の通り。▽「ananAWARD」特別賞・黒柳徹子▽「ananAWARD」50th大賞・林真理子、松任谷由実▽「ananAWARD 2020」大賞・SixTONES、Snow Man

左からSixTONES（田中樹、ジェシー）、Snow Man（ラウール、岩本照）

## 連載　ニュー・エイジ登場【429】

### 「男の子になりたかった」

と言うよりも、自分はなぜ男の子でないのかわからなかった。

「ビー玉になりたかった」

口に含むと、冷たさと重さが舌に下りてくる。黄金のように特別な物質であることがわかった。

「鳥になりたかった」

移動の自由は精神の自由と思っていた。されど迷い鳥になることを恐れないだけの勇気はなく、臆病という檻に閉じ込められていた。

「風になりたかった」

通学路の坂のうえ、強い風が吹いている日には窒息する遊びをした。風に向かって呼吸のタイミングを合わせると、風が胸の奥まで入ってきてくれた。満たされる感覚を楽しんだ。

「空になりたかった」

帰り道、西の空全体が虹になっているのを見た。空をおおっていた薄い雲が、日を翳らせると同時にその光を散り散りにしていた。太陽が傾くにつれ、空は青に還っていった。

「沈黙になりたかった」

千人あまりが集う礼拝堂で完全な無音を試した。いっさいの震えを失った空気が、わたしたちをひとつの塊にした。外を走る自動車の音ですぐに壊された。

「落ち葉になりたかった」

茶色くくしゃくしゃになったプラタナスの葉が風で縁石にぶつかった。雀が勢いをつけて頭を打ちに戻った。

「さすがだね」と中平さんが森山さんに声を掛けると「助手上がりだからね」と森山さんが自分を皮肉るように言った。そして用があるからと直ぐそばの地下鉄駅への階段を降りて行った。

それを見届けて「でもやっぱりさっきのアングルのも撮っておいたらいいんじゃないかな」と中平さんが言った。私にも少し未練があった。それで「一点は無難なのを撮ったんだから多木さんがどう思うか分からないけどやはり撮ろう」とあらためてカメラを路面すれすれに位置させ、パースペクティブを強調した撮影の準備をした。今度は私が露光値を決めシャッターのチャージもして中平さんがレリーズを押した。

それからさらにもうワンカット、多木さんが選びやすいようにと考え、森山さんのと中平さんのアングルを足して割ったような、正面からではなくやや斜めにファサードを見る写真を私は撮った。

事務所に戻るという中平さんが撮影道具いっさいをタクシーに載せて行ってくれたので、私は撮影済みのフィルムホルダーだけを持って麹町のボンカラーという現像所に向かった。フィルムの現像が上がってくるまでの三時間をそばの喫茶店で待ち、仕上がりを確認して事務所に戻った。

撮影現場の事情を何も知らない多木さんは、ライトボックスにフィルムを並べて森山さんが撮った正対像のを指して「本当はこれなんですが今回はこっちを使ってみることにします」と、最後に私が撮った一枚を選んだ。そして「森山さんも一緒だったんですか」と言い「はい」と応えると「やはり上手いもんですね」と感心した。「これは中平ですか？一緒だったんでしょう？」と指したローアングルの一点は「ちょっと用途にはインパクトが強すぎます」と言って退け、「急ですが明日甲府でまた撮ってきてくれませんか」と言った。

甲府の個人の住宅で使ったグラサードを施工例として撮ってきてほしいという話だ。重いカメラ一式を持って甲府か、と思いながら準備を始めると「35㎜でいいです。コダクロームで撮ってきてください」と言う。「どうしてですか」と訊くと「コダクロームで撮って4×5にデュープ（複製）しましょう。会社の連中はこういう写真は4×5で撮るものだと思い込んでいるんです。35㎜だと手抜きだと思うんでしょうね。でも目的によってはコダクロームの画質で十分過ぎるくらいなんです。広報の担当者にはデュープした大判のフィルムで見せてOKをもらい印刷には35㎜のを使います」と言った。

隣の部屋にいた森山さんと中平さんにもその話は聞こえていて、「多木さんも大胆だね」と言うかのような含み笑いが伝わってきた。すると多木さんは「ビューカメラを使って撮影にかかる時間を35㎜でいろいろ撮る方に使った方がいい。当たり前じゃないですか」と隣の二人に聞こえるように言った。（やなぎもと・なおみ＝写真家・東京造形大学名誉教授）

〈次号へつづく〉

## 中平卓馬をめぐる　50年目の日記　㊸

柳本尚規

通りを挟む位置にカメラを据えた森山さんは、レンズを交換しビルに正対し準備を整えた。

「こういう風でいいのじゃないかな」と冠布を渡され、私はカメラ背面の磨りガラスに映った銀行ファサードの逆さ像を確かめた。なるほどこれが定番というものかと納得がいった。

森山さんは「ピントと垂直線をもう一度確かめて。絞りとシャッタースピードはいま測る。それからキミがシャッターを切ってね」と言った。私が「ありがとうございます。まるで土門拳になった気分です」というと森山さんはぷっと吹き出して通りを渡り戻った。

中平さんは舗道に置いたトランクに腰掛けてまわりの撮影道具類の守りをしていた。私は森山さんが決めた露光値とその前後値の三枚の写真をとって二人が待っているところに戻った。

「さすがだね」と中平さんが森山さんに声を掛けると「助手上がりだからね」と森山さんが自分を皮肉るように言った。そして用があるからと直ぐそばの地下鉄駅への階段を降りて行った。

それを見届けて「でもやっぱりさっきのアングルのも撮っておいたらいいんじゃないかな」と中平さんが言った。私にも少し未練があった。それで「一点は無難なのを撮ったんだから多木さんがどう思うか分からないけどやはり撮ろう」とあらためてカメラを路面すれすれに位置させ、パースペクティブを強調した撮影の準備をした。今度は私が露光値を決めシャッターのチャージもして中平さんがレリーズを押した。

それからさらにもうワンカット、多木さんが選びやすいようにと考え、森山さんのと中平さんのアングルを足して割ったような、正面からではなくやや斜めにファサードを見る写真を私は撮った。

事務所に戻るという中平さんが撮影道具いっさいをタクシーに載せて行ってくれたので、私は撮影済みのフィルムホルダーだけを持って麹町のボンカラーという現像所に向かった。フィルムの現像が上がってくるまでの三時間をそばの喫茶店で待ち、仕上がりを確認して事務所に戻った。

撮影現場の事情を何も知らない多木さんは、ライトボックスにフィルムを並べて森山さんが撮った正対像のを指して「本当はこれなんですが今回はこっちを使ってみることにします」と、最後に私が撮った一枚を選んだ。そして「森山さんも一緒だったんですか」と言い「はい」と応えると「やはり上手いもんですね」と感心した。「これは中平ですか？一緒だったんでしょう？」と指したローアングルの一点は「ちょっと用途にはインパクトが強すぎます」と言って退け、「急ですが明日甲府でまた撮ってきてくれませんか」と言った。

甲府の個人の住宅で使ったグラサードを施工例として撮ってきてほしいという話だ。重いカメラ一式を持って甲府か、と思いながら準備を始めると「35㎜でいいです。コダクロームで撮ってきてください」と言う。「どうしてですか」と訊くと「コダクロームで撮って4×5にデュープ（複製）しましょう。会社の連中はこういう写真は4×5で撮るものだと思い込んでいるんです。35㎜だと手抜きだと思うんでしょうね。でも目的によってはコダクロームの画質で十分過ぎるくらいなんです。広報の担当者にはデュープした大判のフィルムで見せてOKをもらい印刷には35㎜のを使います」と言った。

隣の部屋にいた森山さんと中平さんにもその話は聞こえていて、「多木さんも大胆だね」と言うかのような含み笑いが伝わってきた。すると多木さんは「ビューカメラを使って撮影にかかる時間を35㎜でいろいろ撮る方に使った方がいい。当たり前じゃないですか」と隣の二人に聞こえるように言った。（やなぎもと・なおみ＝写真家・東京造形大学名誉教授）

〈次号へつづく〉

## 田原総一朗の取材ノート

### 菅首相への提言

一一月一九日朝、キャピトルホテル東急で菅義偉首相に会い、この国のために何としてもやるべきことを強く求めた。

一つは、菅首相が国会で表明した、二〇五〇年までに脱炭素社会をつくる、という宣言についてであった。

この国の政治家は、安全保障とエネルギー問題については触れたがらない。責任を持って取り組む政治家がいない。野党はもちろん、自民党にも、である。

二〇五〇年までに脱炭素社会にするということはCO2を出す石炭火力や石油火力をゼロにすることである。

そのためには、二〇三〇年のエネルギー構造をどうするのか、それを二〇二一年の夏までに決めなければならない。

たとえば、政府は二〇一八年に、二〇三〇年のエネルギー構成を発表したが、再生可能エネルギー二二～二四％、原発二〇～二二％、そして石炭火力、石油火力などが五六％となっていた。

しかも、このとき、自民党の幹部議員たちに確かめると、「経産省の報告書を見ただけで、誰も、その内容を確かめていなかった。

だが、二〇五〇年にCO2をゼロにするためには、少なくとも二〇三〇年には二五％以下にしなければならない。そのときに原発は何％にするのか。

経産省の幹部たちは、何も決まっていない、といい、自民党の政治家の誰が責任を持って取り組んでくれるのか、と困惑して逆に問うた。

そこで、専門家たちに確かめた上で、額賀福志郎氏と甘利明氏の二人を、本人に確認した上で菅首相に強く推薦した。

そしてもう一つ、新型コロナウイルスが第三波で、東京、北海道、大阪など全国で激しい勢いで拡大している。

GoToトラベル・イートなどさまざまの規制を解除して、しかも寒さがつのってきたためであろう。

そこで、私は菅首相に、県知事にそれぞれの県や地域で、感染の激しいころの規制を強めさせて、保証は全て政府がやる、と表明すべきだと求めた。二一日に対策を取ることにはしたようだが、具体的に何をどうするのか、早く決めるべきである。（たはら・そういちろう＝ジャーナリスト）

## 水のなかの水のように

井岡　詩子

「木漏れ日になりたかった」

風に揺れる網の目状の陽光は、超越した存在を映しだすステンドグラスだった。晴れた日、木のしたに座るだけでその者に逢えた。透かし模様の装飾は御守りのようなもの。

「宇宙人になりたかった」

ある日、目覚めたらすべてが夢であった。そんな日を待ち続けていた。毎朝わたしとして目が覚めるという絶望を二十数年繰り返して、ようやく認めざるを得なくなった。この世界とわたしはどうやら現実に存在しているのだと。

「地球になりたかった」

祖父の灰を構成していた物質がこの体に巡ってきたとき、骨張った手に触れる夢を見た。静かな冬の朝、キジバトが鳴いていた。ミルクティーを飲んだ。

「そのときが来たら、大地に横たわり、湿った土の匂いを嗅ぎながら野垂れ死にしたい」

垣根のなかで静かに眠っていたカラスのように。

＊

わたしの居るべき場所はここじゃない。ほんとうの故郷がどこかにあるはずで、早くそこに還りたい。長いこと、そのような強迫観念に支配されてきた。この漂流したノスタルジーが、バタイユとの唯一の接点だったのではないかと思う。なんの知識もないまま偶然手に取った『宗教の理論』で「失われた連続性へのノスタルジー」についての記述に出会って、少しずつかれの作品を読み進めるようになった。

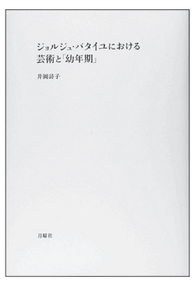
そのノスタルジーをいっときでも満たすためにバタイユが供犠を実践したのとは反対に、わたしは、漂流したノスタルジーに身を任せるには臆病すぎて、いつも辟易ろぐ。自分の境界を侵されること、自分の殻から引き摺り出されること、しばしば芸術が試みる（と言われている）ようなそういった出来事に飛び込むことができない。

「水のなかの水のように」在ること。希求と不可能性のあいだで、動物と人間のあいだで、誕生と死のあいだで、その隘路を探し求める。なにも知らなかったとき、わたしたちがそのただなかで遊び、眠り、泣き、笑っていたはずの隘路。

垂直の滑り台から、周りの子どもたちと同じように飛び降りることができず、いつまでも滑り台の隅に腰かけていた。跳ぶのは楽しいだろうか。わたしは跳べない。きっと、足元の落ち葉を拾い続ける。

★いおか・うたこ＝京都芸術大学（旧称：京都造形芸術大学）・摂南大学非常勤講師。美学・芸術学・表象文化論。京都大学博士（人間・環境学）。一九八七年生。

## 井岡　詩子著　ジョルジュ・バタイユにおける芸術と「幼年期」



A5判・192頁・3500円
月曜社
978-4-86503-096-9
TEL. 03-3935-0515

## 編集室から

この半年で生活習慣、人との距離感、コミュニケーションの取り方まで、すっかり変化してしまったが、コロナ禍にフィールドに出られぬ人類学者はどうしておられるのかと思ったら、お二人とも自分の内なるフィールドを旅し、深々と思考されているのだった。自分そして他人、動植物やモノ、世界の様々なものと往還し、インプロヴィゼーションの姿勢で、音を奏でることは、学問を超えて、私たちがこの日常の閉された場所に押し込められないためにも必要なのではないか、と思う。そういえば対談の朝、いつも使っているパソコンが立ち上がらず（前日新しいパソコンが支給されたのだ）、私の気持ちが離れたことを察したのかと、ドキリとしたものだった。（S）

◆次号（12月4日号）予告　鼎談＝紅野謙介×内藤千珠子×成田龍一『〈戦後文学〉の現在形』（平凡社）刊行を機に（10頁・定価363円）

## 図書館員のおすすめ本

### Title　犬の伊勢参り

仁科邦男 著
◇平凡社（平凡社新書）◇2013年　◇800円（税別）

江戸時代ほとんどの人が「一生に一度はお伊勢参りに行きたい」と思っていたそうだ。現在においても1年間に約800万人の方がお参りする憧れの場所である。この本は，人ならぬ犬の伊勢参りについてその始まりから終わりまでを，膨大な資料によってつまびらかにしたものである。

記録によると，犬の伊勢参りの始まりは1771（明和8）年4月16日の昼頃であったことが序章で述べられる。1匹の犬が外宮北御門口から手洗場に行き，ここで水を飲み，本宮に来てお宮の前の広場に平伏し拝礼する格好をした。そのまま外宮の一之鳥居口から出て五十鈴川を渡り内宮の本宮広場でも拝礼をしたそうである（p.22）。これを皮切りとして，このような「お伊勢参り」の犬が記録上次々とあらわれる。首から札を下げて旅費の銭をもっている犬は「お伊勢参り」の犬として，人々は見かけたらえさをあげたり泊めてあげたり手助けをした。そして犬は，お札をもらって帰っていったという。

第一章ではこの犬の伊勢参りが「虚説」か「実説」かを問題提起し，第二章では犬が単独で伊勢参りをする様子がさらなる資料を元に紹介される。

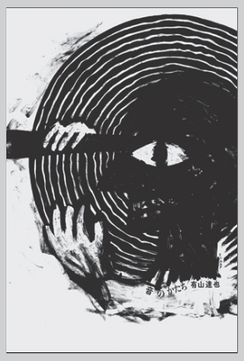
犬に思いを託してお伊勢参りをさせる関係が各章を通して浮き彫りにされている点は，他の伊勢参り関連図書では見られない記述であり，貴重な資料であると言える。牛・豚の「お伊勢参り」もあったらしいという記述も，興味深い。

終章では，明治になって犬の「お伊勢参り」がなくなってしまった背景が述べられている。それは，町犬や村犬を洋犬と同じように飼主を明確にして飼犬化を図ったことによる結果であるという。文明開化が犬にも押し寄せたと言えよう。

江戸時代のとてもあたたかく，ほのぼのとする人と犬の貴重な記録である。筆者の膨大な資料集めにも敬服する。

越智由美子（おちゆみこ）　亀山市立中部中学校，日本図書館協会認定司書第1145号

### Title　音のかたち



有山達也 著　齋藤圭吾 写真
◇リトルモア　◇2019年　◇2,500円（税別）

「レコードって，針を端っこに置くんだよ」と言ったら，その生徒は迷わずターンテーブルの真ん中にアームを持っていった。その衝撃。だがアナログ盤に塗れた青春を送った私でも，なぜあの溝に針を落とすと音が再生されるのかを実は理解していなかった。この本を手にするまでは。

レコードの溝はV字形をしていて，モノラルはその両側に同じ凸凹が，ステレオは左右に違う凸凹が刻まれている。この刻み方のことが「カッティング」なのであった。巷のビニール・ジャンキーたちが，カッティングがどーのこーのと言い合っていたり，伝説のレコーディング・エンジニア，ジェフ・エメリックが，「1964年の夏，ぼくははじめての昇進を果たし，アセテート盤のカッティングを担当することになった。」（『ザ・ビートルズ・サウンド　最後の真実』奥田祐士訳　河出書房新社　2016　p.138）と書いていたりするのを，わかった気になっていただけと思い知らされた。

でも，この本の真にすばらしい点は，良い音が生まれるための「かたち」への着目というテーマ設定にある。レコードの溝の美しいマクロ写真。針の振動を音に変換するフォノイコライザーに使われているトランジスタやコンデンサーの愛らしい形。イギリスのベッドフォードに住むオーディオ・マニアの散らかった作業机。ヴィンテージのカッティングマシン。そして，針に研磨される前の天然ダイヤモンドの粒々。

西にキング・オブ・アナログと呼ばれるマニアがいれば飛んで行き，東に1949年からダイヤモンドのレコード針を作り続けている精密宝石会社があれば取材を申し込み，著者は良い音のかたちを求めて探求を続ける。そして，結論はこうだ。「演奏者の熱だけでなく，その保存，再生に関わる人たちの熱き思い」（p.126）。結局，形をつくるために形の無いものが不可欠なのであった。

松田ユリ子（まつだゆりこ）　神奈川県立新羽高等学校

公益社団法人　日本図書館協会　https://www.jla.or.jp/　本コーナーは『図書館雑誌』（日本図書館協会発行）にて連載されています。

# 川内倫子・山崎ナオコーラ＝対談
# 写真と言葉、子どもとの時間
## 『as it is』『そんなふう』刊行

写真家・川内倫子氏の写真集『as it is』（torch press）、エッセイ集『そんなふう』（ナナロク社）が刊行された。陽射しや自然に包まれた、お子さんやご家族を見つめる写真と言葉が魅力的な二冊である。刊行を機に川内氏と作家の山崎ナオコーラ氏に対談していただいた。（編集部）

### 時間の流れを表す生後三年の特別な時間

川内　今回の二冊がほぼ同時期に出たのは偶然ですが、とてもよかったことだと思っています。たまたま一冊目の『as it is』と、Pasu.jpの連載を主にまとめた「そんなふう」を書籍化した2冊目ができるタイミングがちょうど合ったんです。どちらの本にどの写真を入れるかを、同時進行で考えていくことができました。撮影した時期もテーマも近いので、写真と文章の内容がそれぞれに合うようにしました。

またコロナ禍の自粛期間中に、この二冊を構成する時間をゆっくり取れました。海外に行く予定もなくなってしまったので、その作業にじっくり向き合えたのもよかったです。

娘が一、二歳のころ、出版社の方にその写真で一冊にまとめませんかと言われたときには、まだ早すぎるなと感じました。娘が成人したときぐらいに一冊にまとめるなら、大きな成長の変化もあって時間の流れもわかるから面白いかもしれないと思っていたんです。その一年後に、保留していた企画をまた持ち掛けられて、具体的に写真選びを始めてみたら、できるかもしれない、と。また一年、子どもが成長しているのを見ていると、三歳までの記録をまとめておこうと思ったんですね。

山崎　最初は、二〇年という長いスパンで本を出そうと考えられていたことに、びっくりしました。赤ちゃんの状態はどんどん変化するし、そこから見える景色もどんどん塗り替えられていく。子どもといると時間の感覚が変わるし、時間というものに意識的になります。

川内　山崎さんは『母ではなく、親になる』（河出文庫）で、娘さんが一歳になるまでの過程をひと月ずつ書かれていますね。それが記録として、読んだ人の心に残る。赤ちゃんは体も言葉もどんどん変わって、できることが増えていくから、記録していないと忘れちゃうし、一年前のことを思い返しても遠い過去に感じられますよね。だから私ももっと細かく書いておけばよかったなと思うこともあります。

以前に『Cui Cui』（フォイル）という家族の写真集を出したことがあります。実家に帰省したときに、自分の祖父と甥っ子を中心に撮った十三年間の記録です。家族のアルバムというよりも、その時間をひとつのサイクルとしてまとめたかった。今回も、娘の写真集というよりも、娘を被写体にした何かの本になればいいと思っていました。

山崎　お読みいただきありがとうございます。小説やエッセイ、音楽や映像は、時間を表す芸術ですが、写真は場所や一瞬の出来事を表現していて、個人と強く結びついていると思います。けれど川内さんの写真は、あまり場所と結びついていないものが多くて、ご家族の方が写っていても、人間個人が前面に出てきていないように感じます。そこに写る人は、あなたでもありうるし私でもありうるかもしれない。とても興味深いのは、川内さんの写真には場所よりも時間が表現されているということです。

川内　倫子氏

川内　自分が思っていることが伝わっていて、すごくうれしいです。写真を撮るときに、自分は抽象性を求めているところがあります。写っているものそれ自体ももちろん重要ですが、被写体がすべてではない。それを通して、時間の流れやもっと広いテーマを表したいと思っています。

写真は写っているのがすべてであるという概念を覆したい気持ちもあり、どこまで抽象化できるのかというチャレンジが毎回あるんです。

山崎　『そんなふう』には、娘さんが生まれて一、二ヶ月のときの写真があり、そのお話も書いてあります。私自身、四歳と一歳の子どもがいます。赤ちゃんがいる人でも、生まれたばかりの赤ちゃんを見るとうらやましくなると書かれていて、そこを読んで私もその感情がわかりました（笑）。

川内　娘の三ヶ月健診で病院に行ったとき、一ヶ月健診の赤ちゃんを見てちっちゃい～と思った（笑）。

山崎　子どもにかぎらず私たちは、失われていくもの、変わっていくものを感じながら生きています。そういう存在を見たときに、うらやましいという感情を日々味わっていると思うんですよね。世界がどんどん変わっていくなかで、これはもう失っちゃったんだ、ここにはもう戻れないんだと日々感じているから、新鮮なもの、まっさらなものを見せられたときに、うらやましく感じるのかもしれません。川内さんは、時間の流れのなかで失われていくものを撮られているのではないかと思います。

川内　どの作品でもそこが基盤にあります。時間の流れの残酷さや儚いもの、諸行無常ということが、私の写真の共通のテーマです。子どもは時間の流れを全身で表すし、壊れやすいもの、儚いものの塊という感じがして、自分が好む被写体としてぴったりなんです。

山崎　赤ちゃんの顔も体も、短い時間にすごく変わりますよね。大人は三年経ってもそんなに変わりませんが。子どもが生まれてからの三年にはすごく大きな変化があって、その三年で娘さんの記録をまとめられたというのは、とても意味のあることだと思います。

川内　そうですね、大人の五年や十年ではなく、生まれてからの三年という時間って特別ですよね。

山崎　そうなんですよね。そのあと子どもが言葉を獲得しちゃうと、またいろいろと違ってきます。私は言葉を扱う仕事をしていますが、子育てでも言葉の恐ろしさを感じます。ものごとに言葉をわかりやすく当てはめていくのは、ひとつの暴力でもあります。言葉を獲得する前のもやもや感を大事にしたいと思っているので、それより前の三年間というのはよくわかります。

写真集『うたたね』のときから、川内さんの作品がずっと好きなんです。日記という分野も好きです。小説や批評は、ひとりの人間がその構成を考えて作りますが、日記はそういうコントロールがきかなくて、自然と山場ができたりします。

川内　もともと写真が自分の体質に合っていますし、日記を書くのも自分に合っているんですよね。毎日起きることを一個ずつ、一回止めて考えたい。リスがほっぺに食べ物を入れてもぐもぐやっているように、何があったのかを咀嚼したい。そうしないと時間の流れが速すぎて、いま自分は何をしているんだろうかと、ときどき戸惑ってしまいます。

だから写真を撮ってプリントして、それを編集して、一回止めて考える作業が必要で、日記にも同じ作用があります。それを写真として残すのか、文章として残すのかという違いです。目の前に起こったことに対して、反芻して考えたいんですね。

山崎　写真集を作るときの編集作業も反芻にあたるんですか。

川内　そうです。反芻と再構築があります。一回見たものを解体するというか、更地に戻してからもう一回組み立て直す。それが一冊にしていく作業です。なんでこれを撮ったんだろうかと考えることが大切ですね。その過程の中で見えていなかった自分の無意識が現れてきます。そこが作品を作るいちばんおもしろいところだと思います。

最初にコンセプトががっちり決まっていたら自分としてはつまらないですよね。そのゴールに向かうだけの作業になってしまいますから。作業しながら、自分は無意識にこういうことを考えていたんだとだんだんわかってくる。山崎さんは小説やエッセイを書いていて、そういうことはないですか。

山崎　私が書くときも旅をするように、地図がないところを進んでいるような感じがあります。一行を書いたあと、二行目はどうなるかわからない。とくに小説は、一頁めくったら数年後、数十年後、あるいは何百年後のことが書けてしまう。そこがおもしろいところですね。川内さんの写真には、そういう時間の流れも感じるんです。

川内　家族と娘の写真でいうと、十三年間と三年間の記録ではありますが、それ以外の作品でも、なるべくそういうふうに時間の流れを感じられるように作りたいと思っていますね。ページ構成や被写体を変えることによって、その流れがより感じやすくなるということがあります。

A5判・222頁・2300円
ナナロク社
978-4-904292-98-3
TEL.03-5749-4976

### 日記と写真、生と死 反芻と再構築の過程

川内　私も人の日記を読むのが好きで、日記に出てくる偶然の出来事がすごくおもしろい。日記ってちょっと写真的なんですよね。作家さんの日記の場合、小説とは違う一面が見えたりもする。

山崎　『そんなふう』にも、生と死が自然に入ってきていますよね。娘さんが生まれて大きくなっていくなかで、小鳥が死んじゃったり、お義父さんが亡くなってしまったりする。そういう出来事がコントロールの外で起きて、ひとつの枠に入り込んでくる。それがとても写真っぽくて、日記っぽくて、川内さんっぽいなと思いました。

川内　もともと写真が自分の体質に合っていますし、日記を書くのも自分に合っているんですよね。毎日起きることを一個ずつ、一回止めて考えたい。リスがほっぺに食べ物を入れてもぐもぐやっているように、何があったのかを咀嚼したい。そうしないと時間の流れが速すぎて、いま自分は何をしているんだろうかと、ときどき戸惑ってしまいます。

だから写真を撮ってプリントして、それを編集して、一回止めて考える作業が必要で、日記にも同じ作用があります。それを写真として残すのか、文章として残すのかという違いです。目の前に起こったことに対して、反芻して考えたいんですね。

山崎　写真集を作るときの編集作業も反芻にあたるんですか。

川内　そうです。反芻と再構築があります。一回見たものを解体するというか、更地に戻してからもう一回組み立て直す。それが一冊にしていく作業です。なんでこれを撮ったんだろうかと考えることが大切ですね。その過程の中で見えていなかった自分の無意識が現れてきます。そこが作品を作るいちばんおもしろいところだと思います。

最初にコンセプトががっちり決まっていたら自分としてはつまらないですよね。そのゴールに向かうだけの作業になってしまいますから。作業しながら、自分は無意識にこういうことを考えていたんだとだんだんわかってくる。山崎さんは小説やエッセイを書いていて、そういうことはないですか。

山崎　私が書くときも旅をするように、地図がないところを進んでいるような感じがあります。一行を書いたあと、二行目はどうなるかわからない。とくに小説は、一頁めくったら数年後、数十年後、あるいは何百年後のことが書けてしまう。そこがおもしろいところですね。川内さんの写真には、そういう時間の流れも感じるんです。

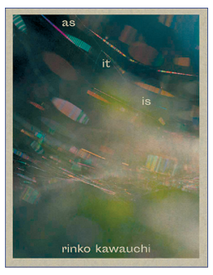
川内　家族と娘の写真でいうと、十三年間と三年間の記録ではありますが、それ以外の作品でも、なるべくそういうふうに時間の流れを感じられるように作りたいと思っていますね。ページ構成や被写体を変えることによって、その流れがより感じやすくなるということがあります。

### 夢で見た景色とテーマ 子どもを見つめる目線

山崎　〈あめつち〉の野焼きの写真も好きなんです（『照度　あめつち　影を見る』）。これは最初、夢で見られたんですか。

川内　そうなんです。ある日その景色を夢で見て、気になるなと思っていたら、半年後にテレビでまったく同じ景色を見て、阿蘇だとわかった。ネットで阿蘇を調べたら「野焼き」というワードが出てきて、野焼きは以前から撮りたかったモチーフだったので、これは行けというサインだなと思ったんです。実際に行ってみたらすごくはまりました。

自分が行きたい、撮りたいと無意識に欲していた場所が夢に現れて、それと現実が結びついたんだと思います。



B5変・144頁・3000円
torch press
978-4-907562-24-3
order@torchpress.net

山崎　写真を撮っているときは、こういうふうにまとめようとイメージするのですか。

川内　まず最初に撮影して、そのあとでプリントしたものを並べて考えます。そこでこの写真の横にこれがあったらいいんじゃないかと思って、だんだん継ぎ足していく、だんだん形になっていくんですよね。

だから最終的なゴールがちらっと見え始めるときが、作っていていちばんおもしろいと感じるところですね。あと少しで、そこまでたどりつける、と。小説を書いているとき、そういう瞬間はありませんか。

山崎　小説を書いている途中に、数行のある箇所で、快感が沸くときがあります。それが、書いているものが形になるのが見えたときなのかもしれません。

川内　そうなんですね。山崎さんは編集者の方と最初にテーマを決めるのですか。

山崎　エッセイの場合はそうですが、小説の場合はテーマも締め切りもなく自由に書かせてもらえることが多いです。書きためたものを送って、ちょっとダメ出しされて、また書き直すという作業ですね。私はこつこつ書くということをずっとやっているので、写真家さんは気になる場所に行って、撮って、そのあとプリントして編集するというように、いろいろな瞬間があって楽しそうだなと思います。

川内　自分はこつこつ書く人に憧れていたんです。そもそも機材が苦手でした。できるだけ機材も少なく、自分の手だけで動かせるものの方がよかった。だんだん技術を習得してゆっくりなじんでいったんですね。

写真を撮るのがおもしろくなってきたのは、だいぶ時間が経ってからです。撮影に外に出かけて家のなかでプリントや編集作業をし、一冊にまとめるという一連の行為が好きですね。そうやってだんだん今のスタイルができてきたんですね。

山崎　ナオコーラ氏

山崎　外出自粛で出かけられないと、写真を撮る機会は減りますか。

川内　少し減りましたが、コロナ禍の自粛期間にニューヨーク・タイムズやガーディアンから、部屋のなかや家の近所の写真を撮ってほしいという依頼を受けたりもしました。家の近くで動植物や夕焼けなどを撮ってまとめてみたら、いつもと変わらないことをやっているんだと気づきました。そういうことができるのは、とてもありがたい仕事だと思います。

山崎　川内さんの写真を見ていると、あ、これは私の知っている世界だ、と思うんです。この瞬間は私も見て、経験していて、そのところが切り抜かれている、と。でも、自分では切り抜けないんですよね。だから写真家はすごく必要な仕事だと感じるんです。

今、みんなが外出自粛で出かけられないときに、そういう依頼がくるというのも、まさに川内さんにしかできないことがあるからなんだと思います。

川内　日々を冷静に見つめる山崎さんのエッセイに、「でもやっぱり子どもはかわいい」と書かれているのが印象的です。そこには作家の目線と母親の目線が入り混じっているような感じがあります。その温度差がおもしろいですね。

山崎　そうかもしれません。子どもはすごくかわいいですよね。川内さんも今回の写真集で、冷静にお子さんや景色を撮っていらっしゃる印象を受けました。

川内　それは職業病なのかもしれないですね（笑）。なんでこんなふうに自分の子どもを撮れるのって聞かれます。考える前にただ撮っていて、自分の娘と思って撮っていないんですね。そういう瞬間があります。もともと子どもを撮るのが好きなんです。

山崎　今までいろいろな子どもたちを撮ってこられたと思いますが、自分のお子さんを撮るときとの違いはありますか。

川内　大きいカメラで撮る写真家モードのときはそれほど変わらないと思いますが、iPhoneでとりあえずに記録を残しておこうというときには、完全に親モードですね。iPhoneでは子どもが何かをつぶやいていたり、鼻水を垂らしていたりするのをとっさに記録として撮っておくんです。

山崎　そうなんですね。私も子どもについて、エッセイでは冷静に書くけれど、自分の日記ではちょっと違うモードで書いています。あまりおもしろくはないけれど、大きくなったときに子どもが喜ぶだろうことを日記に書いておいて、反抗期になったときに読ませようと思っているんです。

### もやもや感と言葉のずれ 写真と文、抽象とバランス

山崎　川内さんの写真には、言葉になる前のもやもや感、これは言葉で書けないということが写っているので、作家としては嫉妬するというか、ちょっと悔しい思いもあります（笑）。

川内　写真でしかできないことがあるからおもしろいですね。あいまいなところ、間にあるものに触れられる写真が、やはり自分の体質に合っているんだと思います。子どものころは絵を描くことが好きでしたが、わりと早いうちに、自分は他の人のようにうまく絵を描けないんだなと気づきました。『そんなふう』の最後にも書きましたが、娘が迷いなく、さっと線を引く姿を見て感動したんです。自分は迷っちゃう。その時点でいい絵は描けない。でも写真だと、迷っている間にシャッターを押せばいい。だから自分は写真が合っているんだなと思いますね。

逆に、写真にできないことが文章にはできます。

山崎　言葉は、そのもやもや感をわかりやすくするひとつの暴力です。もやもや感に無理やりに言葉を当てはめている。もやもや感やいろいろな感情が生まれますが、表現された言葉とずれているところがあります。そういう比較が必要で、文章にはそれを楽しむことができる自由があると思います。

エッセイも、起きたことを嘘なく書いていますが、本当にあったことと違ってくるんです。

川内　文章になった時点でそうですね。

山崎　そうなんです。もちろん書かないこともあるから、書く内容を選んでいる。それに、ある枠にはめて表現している。その意味では、エッセイにもフィクションの要素があると思います。

写真にも、あるところを切り取っているから、写っていないところがあります。撮るものが選ばれています。

川内　そうですね。そのなかで、抽象度をどこまで高めていくかがおもしろいところですね。写真は「真実が写る」と書きますが、それは皮肉でもあると思うんです。というのも、何をもって真実とするかは誰にもわからないから。実際にあったことは写っているんだけれど、ある画角で切り取った時点で選んでいるし、編集した時点で操作している。

山崎　川内さんの言う抽象化の話につながるかはわかりませんが、文章を書くときに、リアルよりもリアリティを求めた方が、読む人に届くのではないかと思っています。とにかく本当のことを一生懸命書くよりも、いろいろな人や出来事と出会うなかで、私がいったん消化したものを書いた方がより現実感が増す気がします。

川内　ひとつの点で見ないで、構成したときに他の点とのかかわりのなかでその点がどう生きるかを見る。バランスで見るということですよね。一枚の写真が二五〇ページのなかにあるときの見え方が当然変わってくる。その前にあるもの、その次に来るものを含めた、最終的なバランスによるわけですね。

山崎　『そんなふう』に書かれている猫のサイちゃんが、『as it is』の写真にも写っています。二冊を両方拝読していると、いろいろなつながりが見えてきて素敵ですね。

川内　二冊で補完し合っているところがありますね。文章と写真の割合が対称的です。『as it is』は写真が多くて文章が短く、『そんなふう』は文章が多くて写真が少ない。

感受性の鋭い人がたくさんいて、自分が思ってもみなかった感想をいただいています。先日の個展の会場に、手紙を置いていってくださった方がいました。子どもが巣立ったあとに「空の巣」になったような寂しさを感じていたという方が、自分にも子どもとの尊い時間があったということを思い出させてくれたと書いてくださっていて、作品を出した甲斐がありました。これからもそういうものを作っていきたいと思っています。

（おわり）

全国の書店員が選んだ、一番読んでほしいノンフィクション

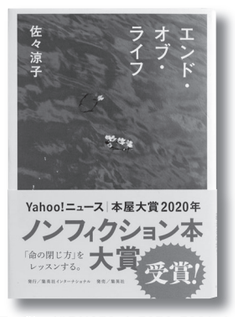
エンド・オブ・ライフ

「命の閉じ方」をレッスンする。　佐々涼子

「看取りのプロフェッショナル」は、自らの死をどう受け入れたのか？
在宅での終末医療を感動的に描く。

Yahoo! ニュース｜本屋大賞 2020年
ノンフィクション本大賞
受賞作

書店員さんの推薦のことば
●最初から最後まで、一番揺さぶられ続けた本です。
（滋賀県　本のがんこ堂　野洲店　原口結希子さん）
●闘病モノは読みたくない。そんな先入観はどこかに飛び去り、すぐに引きずり込まれた。
（埼玉県　TSUTAYA　南古谷店　石木戸 美穂子さん）
●今年いちばん泣けた本。
（東京都　三省堂書店　有楽町店　大西香苗さん）
●「命の閉じ方」と一緒に、「今をどう生きるか」を教えられた気がします。
（奈良県　WAY書店　TSUTAYA天理店　岩瀬竜太さん）
●「死に対する不確かな怯え」が少し形を変えたような気がします。
（東京都　旭屋書店　池袋店　礒部ゆきえさん）
●フィクション以上に心に残る場面が多い。毎日を一生懸命に生きようと思う作品。
（長崎県　好文堂書店　尾上美智子さん）




発行＝集英社インターナショナル　発売＝集英社　本体1700円＋税　ISBN978-4-7976-7381-4
集英社インターナショナル　https://www.shueisha-int.co.jp/　101-0064 千代田区神田猿楽町 1-5-18